特11
70
5196

091808-000-3

特11-70

当世娘性質

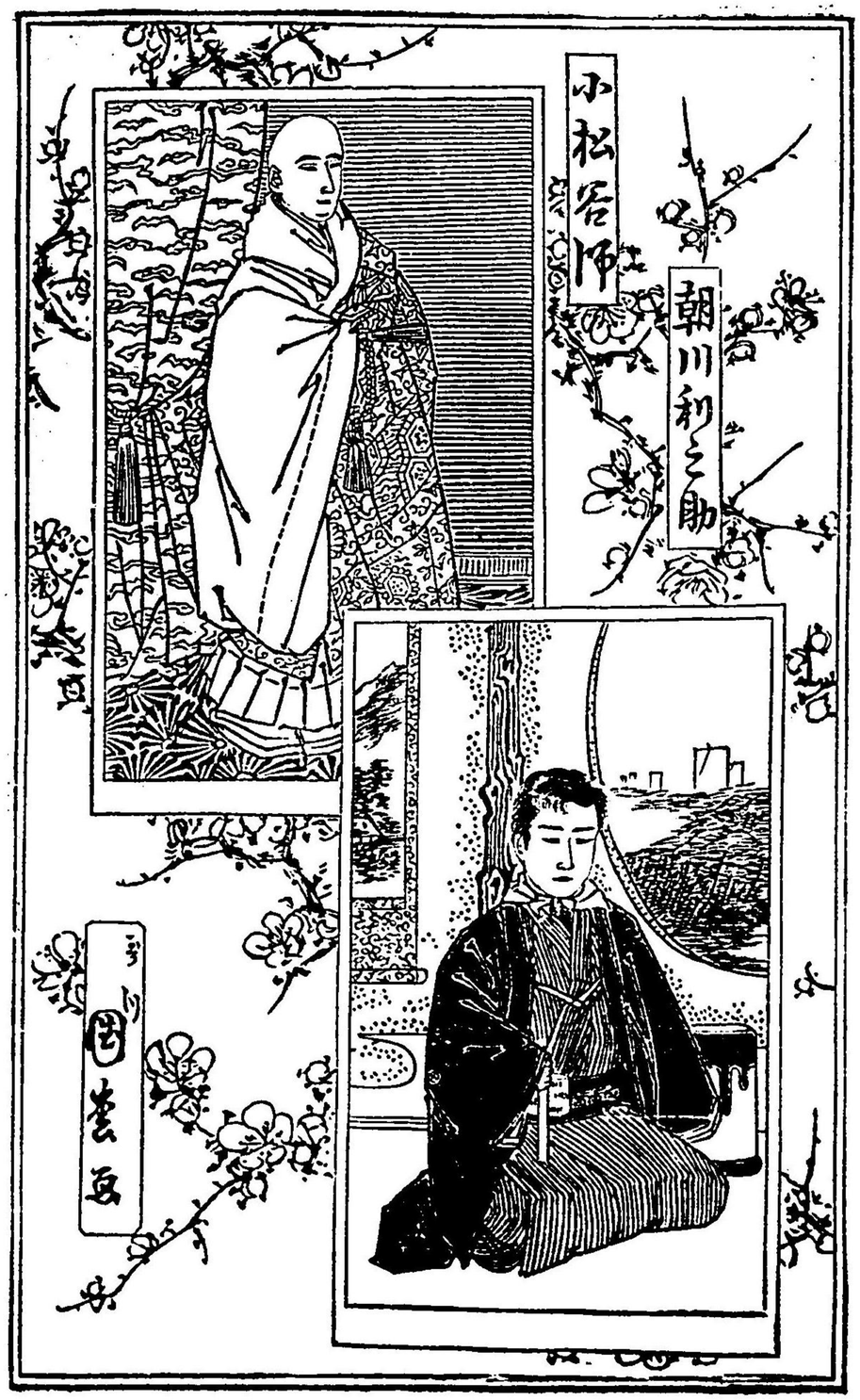
四文字舎　半笑／著

M19
DBO-0324

明治十九年一月二十六日内務省聘付

中西お彩

教師西森


小松谷師
朝川利之助
国芳画

曙夢屋おたき
手代文七

天野娘お牛
乳母おきん

花房國二
天野五兵衛

當世娘性質之序

理窟を眞面目で言へば平凡の理窟滑稽を洒落て言へば尋常の滑稽理窟を洒落て言ひ滑稽を眞面目で言ふとそ却て眞の理窟眞の滑稽といふ可れ吾友四文字舍半笑能く理窟を言ひ能く滑稽を言ふ男なり頃來東洋の大勢に就き感ずる所ありて當世娘性質の著あり蓋理窟を洒落て言ひ滑稽を眞面目に言ひたる者なり日本繪入新聞社に投じて其紙面に掲けしが眞面目家は其理窟に感じて妙と呼び洒落人は其滑稽に驚いて奇と叫び貴賤上下老若男女藝妓も釋氏もをしなべて寓意を愛で趣向を喜び面白ひの評判江湖に嘖々たり巨文堂の主人其評判の高きに耳を聳て之を冊子よ仕立て世ゑ刊行はゞ必や大吉利市あらんと理窟でもなく滑稽でもなく只算盤づくの一點より忽ち活版に附して校正を予に委ぬ予や無識不粹理窟を解せず滑稽を辨へざれども亦娘性質を面白いと思ふ一人なれゞ至極賛成ヲット承知と卽坐に朱筆を濡らし字句を校正するの片手間理窟でも滑稽でも無い一言を記して賴まれもせぬ序文に換もと爾云

時に明治十八年十二月十五日の夜朝鮮の事ありて吾日本政府より使臣を遣派さるゝ旨東京より電信にて通知ある折しも日本繪入新聞社の編輯局の片隅よて薄暗き闇燈の心を捻上つゝ筆を採る

半痴道人　宇田川文海

當世娘性質

第十回

四文字舍半笑戯作
宇田川文海校閲

當世劇場に角力縦覧物小屋青楼料理商の軒を併べ夜壹とおき肩摩轂擊大坂第一の繁華の地道頓堀に架渡す戎橋の南詰に客待をする數多の車夫「旦那車ハドウでゴザリます北へ去ぬ車でゴザいますからお安くお伴を致しすモシ出來さへんかェナモシ出來さへんかアーく今夜程客の物をぬかさめ晩もへねものだ天満の嶋嶋を一本流して交番所の前から戎橋の中央さでお百度を打ても横に冠りを振向く所か正面切たさゝ物もぬかさず適々ぬかせゞ三津寺筋だとか八幡筋だとか云て乗るやつハ一人もなし日本第一の地價を納めて日本第一の繁昌の地といつても此う淋しくてハ眞に困るぢやアねへかと愚痴をこぼしてゐるその傍から一人の車夫が笑ひかけ「コウ難波何を愚痴をこぼしてゐるのだ何ぼ汝が泣言をいつても客人の耳には聞ゑねへから何にもならねへ何故といつ

て見や處が戎橋だから客は皆墨だアハヽヽヽヽ「ヱヽ馬鹿にするな面白くもねへ「時に難波汝昨日と今日と車が違つて居るぢやねへか何處で借りて來たのだ「ナニ何處で借りて來たと失禮なことを吐すお己樣の手車だ渡邊橋の長久齋や島の内の猿田湯あどの仕入バヂとは譯が違つてかりそめにも東京の秋葉大助が鍛錬に錬鍛た牡丹バヂ然も時給ゝ中尾の東猿と來てゐるのだ

から長や（長町の畧言）南と（渡邊村同前）一口に言れてゐ閉口するのだイヤ長や南といへゝ彼等の仲間の中にゝ近來丹衣の中へドス隠しをこしらへたグル廻しがあるさうだが悪い噂ぢやアねへかこんな評判が高くなると自然乗客が少くなる譯だ「チイ〳〵長や南は譯つたがグルを廻すとは何の事だ「ナニグルを廻すを知らねへと汝も此商賣をするからは長や南の符帖もチットは覚えておくが好いグルを廻すとは商賣人が人車を挽くといふことよ「ナニ商賣人が車を挽くとは「ヱヽ因つた野郎だ商賣人とは曲尺の事だ「フン夫ぢやア泥棒が車を挽くことをグルを廻すとゝいふのか「さうよそのグルの後ろにドス隠しがあるといつても分るめへ平たくいへゝ扱刀と贋品の藏しが造へてあるといふことよグルに此ういふ仕掛があることは恐く松蕉の氣がつくめへホイ又符帖が出た秘葉とは特殊巡査の張番のことだ何と洞棒社會も漸々進歩して種々の新發明をやらかすぢやアねへかと談話の折柄演說會の終りて北座の木戸ゟ數百の聽衆のドヤ〳〵いつるにぞ之に驚き談話も止め「オイ〳〵さらねへ談話の内に最う演說がバレた松も來い

虎も來いへイ旦那車はドウでござりやすお宅さでお伴致しやせうと西に南に北に東に各自に客を乘せ皆四離八分に立去りたる迹に殘りし壹個の車夫四邊見廻し獨言「今の難波とやらの問ず語り是も壹條の詮議の種と傍の交番所の巡査と顔を見合す途炭又一個往來の人の通りかゝれば俄に氣を轉へて聲やさしく旦那は都合迄お伴いたしやせう

第二回

人の議論を吾物顔に耳から口へ知惠の受賣する演說返りの書生

「イヨー是い前田君君も演說の傍聽のね」「ナヽ池上君近來い夜業に獨逸學の勉强を始めたのでッイ御無音」「夫は好い事をお始めだ近來い獨逸學が流行だかゝ僕も始めやうと思つてゐる處サ僕い又た頃來俗用に奔走して肝心の學業にさへ怠たる始末所謂貧乏暇なしで實に閉口さ時に今晩の演說と如何でした多洲武吉君の經濟論辨舌といひ學識といひ例ながら感服のいたり又久山鯨一君の岩戸神樂の滑稽演說神代の昔天安河原の神議を說て例の面白可笑しく國會論を辨じた手際聽衆の腹を捻り頤を解きさした彼

人は當今の蘇秦張儀と云つべし「僕の腦髓に尤も非常の感覺を與へたのは加波龍雄君の東洋大勢論亞細亞歐羅巴と對稱それども其實は亞細亞の北方「サイベリヤ」は魯西亞の支配にして南部の印度地方は英國の所轄となり既る其半洲は歐羅巴人の手に落ち其他の半洲に國を立る者は西方土耳古の管轄を除き東方「アラビヤ」「ヘルチスタン」等の諸國あれども未野蠻國の風習を脫せず固より獨立國の名を下さに足らず唯ヤヽ獨立國と稱するに足る者は支那と日本とあるのみと是から定めて正々堂々の議論をするかと思ふとガラリと口調を變へて日本と支那と印度を女子に譬へ英佛獨米魯等の歐羅巴諸强國を男子に譬へ男子が種々の手段を設け樣々の辛苦を盡し或は恩を施し或は威を示し欺しつ威しつして之を挑む形容に假托て今日の東洋の形勢を說き吾々東洋人民の獨立の精神を皷舞し其議論の活潑なる其辯舌の爽快なる今夕の演說中の第一等僕の如き惰夫も之を聞て思ひず憤發の念を起しさした是等が實ふ有益の議論といふのでせう「御尤々々僕も御同感時に若い定めて御存知ふんが僕の傍にゐた一個の聽衆が提燈

の火で手帖を照し横文でもなれば梵字でもないやうなもので始終辨士の議論を筆記してゐたがアレは何でせう「ウン彼か彼は近來東京から大阪へ支會を設けた日本傍聽筆記法といふものでせう所謂速記法で人の談話をろのさ、速かに書取る辨利なものでアノ蚯蚓のぬたくつたやうな者が卽ち一種新發明の文字で一字が漢字や假名文字の數十字に當るものさ此速記法の事ついては種々談話があるが立談ではつくされんからいづれ近日お寫所へ出て緩々演說しさせう「今のお話の東洋大勢論の娘のお話で思ひだしたが君も知てる中西の娘「ウン彼の唐物町の變者か何でも最ら年は二十四五わるくすると三十近いさうだが今に髷と島田に帶ハ文庫万年娘とハアノ事だらふ「アノ娘につゐて新聞があるが知てゐるか「ナニ新聞アノ娘の事なら定めて舊聞だらふ然し新聞でも舊聞でも搏はないゲさぞ捧腹絶倒の一件だらふ早く聞せたさへ「好々辨士氣取で一番演說しようェヘン諸君よと話し掛しをりから後ろの方より一輛の人車が走來り「ゴンサイ〳〵二人は喫驚左右に飛退き「ェ、權妻ぢやアねへ此方は娘の話だ

第三回

舞臺計では見足ないと茶屋へ俳優を呼年ハ廿を困た身持の呑氣娘

道頓堀戎座劇場の傍なる或る劇場茶屋の二階ゐ角の劇場見物の返りと見ゑ一個の女客が華美ゐ酒宴四五人の若手俳優に二三人の老妓幇間まで加はりて飲つ食ひつ無禮講そも此女客の形容と言ツハ芳齡は二十を幾減か越えて見ゆれども裙摸樣の中振袖ゐ島田髷織物の帶をやの字ゑ結び花房の細工の花簪をさしたるなどまだやち〳〵十七か十八といふ恍惚おき粧飾三十あまりの年增と十五六の小女と五十あまりにて頭の兀し手代の附添たる誰が目ゐ見ても船場内の大家長者格附の上位を占むる何の某の娘さんと思ゑるゝが其人品に不似合おるかゝる遊興こそ怪しけれ鈍八「ひどく外面がさう〳〵しいが戎座の演說が果たと見える 狩間抑六「此頃く段々人間が生意氣ゑ成て新聞だの演說だのと兎角利屈張たことが大流行だ 藝妓「ナニ演說會の流行るのは人間が生意氣に成た計りでいないよ世の中が不景氣で人の心が卑しくなり兎角安いものや無料の物が大流行

今晩の演説も傍聽無料とやらだからそれで譯分らずよ聽に行く人が多いのでせうモシお嬢さまさらでは御ざりませんか女客「お化のいふ通り無料だから聽にもくのさ誰がお錢を出さて面白くもない演説なんぞを聽に行く人があるものか女中「松全体あんなものを劇場小屋でさせるから夫で肝心の演劇に人氣が寄らなくなり近來はとかく見物の足の遠いのでせう女中「お竹「安いものが流行かも知れませんが妾は劇場パ

かりは一圓の場が二圓しても安いと思ひまもは俳優「一圓「賛成々々幇間鉄八「ヒヤ〳〵幇間源六「カウ〳〵お嬢さまは演説がお嫌ひだのよ諸君よの口眞似はドウした者だ婚中にて此樣のことは申さぬものにて候らふ皆々「是は閉口恐入りましたといふ折からヘイ今晩はと次の室へ頭を下る一個の坊主鈍八は夫と見るより鈍八「ナヽ愚七の大層おそかたなといひけヽ女客に向ひ「モシお嬢さまは是は新米の幇間で私しの弟子でごりますドウゾお見知りおかれまして恐入りますをがお杯をコレ愚七お杯を戴だくが好い汝はまだ拜だ事がありますいが此お嬢樣と大坂中よかくれの無い唐物町一丁目の中西のお嬢樣御家風が好いので御成長が自然高品第一結構なおとは西洋風が何よりお嫌ひで俳優や藝人や藝妓がお好き御姿色は此通り貴妃も西施も跣足で逃る程もん此處の豪商彼處の大家のら輩に這入らふ嫁ふ貰はふと緣談口と雨の降るほどおおりあそばすなれど先方に少しでも西洋習風があればをぐお斷り此處におゐでる親方衆のやうに頭に髷を結て牛肉を食ず滿學が好で遊興が好で劇場が好でソシテ門閥が貴くかくては婿ふも貰はぬ嫁にも行ぬと

いふ嬉しい御注文偶似合の縁談があつても婚姻ハ人間の大禮五行陰陽吉凶禍福相承相克星の善惡其他年月時日方位の事まで十分占ひ調べた上にも能く調べ何一つ障りがあつても忽ちサランパア先度も稀らしくお話が纏りいよ〳〵明日と結納の取替せと成た所で其日が辰の日で然も不成日であつた故一日のばした處が其翌日は己の日で生憎八方塞り其翌日からは四季の土用で東の方が遊行金神南の方がお嬢さまの本命的殺西は暗剣殺乾と巽が破軍八將丑寅が鬼門末申が歳破と四方八方塞りもあいつと來月に延すが好らふと御親類一統協議の上とう〳〵來月と日延に成たが拍子の惡く其翌月からお家の本命が中央に這入て是も同く八方塞り又來月には先の聟君が三年の塞りで其翌年がお嬢さまの厄年かれこれで遂よは破談流石御奮家故何と御念の入たものではないか今時の出來星紳商とは大違ひ實に感伏な御家風てはないかア、あんさり饒舌て恐が切た大きいもので一献頂戴お化さん憚りながらお酌をナト、酒量りなしといへども亂れ及ばずかホイお嬢さまのお好な漢學が出ました

第四回

紫檀の几に端谿の硯の淺い分別賣家と書く唐樣の習字

賣家と唐樣で書く三代目吾の先祖ハ大阪の草分代々町年寄も勤た家格と暖簾の古いを自慢して少しも新らしい思想なく商法の學問ハソッチ退け能や樂譜よ香茶湯歌俳諧に囲碁双六と無用の遊藝にのみ身を凝し古書畫古器物の鑑定ハすれども肝心商資品の檢査ハ出來ず藝妓や幇間を集めて戯謔と巧に云へども荷主や得意の應對は少も出來ず劇場や花街の事ハ明るけれど時世の變遷ハ更に分らず錢ハ遣ふ事を知て錢を設くることを知らねバ漸次に家產仰きて抬人兩替と誇りし家も一人の召仕を遣ふ事もならなくなり昔ハ西區の馬捨場と一口に言ひをりたる川口富島等その他に御一新後店を開きたる會社商店等の新米商家の勉强に段々おされて舊家豪商ハ只名のみにてひたものの衰へ行くのみか或は逼塞或は身代限と湮滅て迹なくなる者さへいと多き中お大阪第一といはるゝ東區の内おて此行末は何と艜場の下最中見かけ計りて家產は唐物町智恵も學

問も中西といふ支那珍器屋是も昔い持丸長者の一人よて尤も其名の聞ゑたる家格さすかに今もその名ごりとて家屋の構造い京の東福寺の伽藍(今い燒失したれど)も宜しくといふ程手廣く住居奉公人も數多く召使へども御一新以來兎角に商法は損耗つゞき殊ふ近來は煎茶ぜ廢れて支那風の事い何くれとなく評判惡けれぱいよ〳〵家產い傾くのみ加之西區富島町の武力商人の淡河澄の洋酒を鬻ぐ一會社と借金の事より紛議を起し遂ふ利非を法律に訴へて敗を取り書入に爲したる地所を引上げられ其後も右の洋酒賣捌會社とい其他に借金の云々ありて尙も爭論の斷間なく夫是にて益々損耗を重ぬれども當主い女戸主にてお華と呼び元より分別に乏しき者ゑれば敢て家事を顧る心なくいつも昔の中西の身代の心にて潛上なる身の行ひ一人娘のおしんも切の所業を見習ひて琴よ三絃よと只遊惡をのみ身の勤めとなし劇場に遊び花街ゑ狂ひいいん方なの驕奢の振舞二十の上を四つ五つ過れども只專横を云ひ愚痴なるとのみに拘泥て未定まる婿もなく家の万事い老主管人の利兵衛佐兵衛ゑ委任せあるが佐兵衛い正直なれども只

頑固なることのみ言張て何彼よつけて因循の沙汰多く利兵衛い之ゑ異りて己が名の利を見るとに明かなれば時世の變遷に能く心を用ひ只舊格古風のみ守りてい遂に世の商人の爲に壓倒されんと頻に心を傷るものから主人お華といひ同僚の佐兵衛さで更にその感ドのなければ己一人の思案にて洋酒會社ゑ始め諸方の金の出入先を奔走して程好くなだめ店の商賣にも意を用ひ內憂外患とも一心に擔任て能く辨へけれぱ中西の白鼠と評判高く聞ゑけり今日ゑ店の結界の內に坐ゑ占て當座帳をつけ終り頻に主家の事に就て腦を碎いてゐる處へ這入り來りし一個の客人「モシ此花瓶い何程でござります又例の懸直いお斷りです」利兵「中西の懸直と惡い習慣が通りものに成て大きに商賣の妨害になりまする以來い決して直懸いヤしませんからドウゾ此呼願を聞ひまするといふ折から鎭臺の號砲ガヅドン「ソラ鉄砲だ

第五回

夜も寢ぜに勉强て主家の爲ゑ忠をつくす番頭の白鼠

先代清右衛門の物數奇にて唐木一式を以て建築なしたる中西の家の奥坐敷にて主管利兵衛はお菲に向ひ「尊嬢のお耳にタコの出來る計りか吾等の舌も固くなる程是迄度々御意見を申したれバ今更云ふ迄もなけれども古い暖簾を鼻に掛けて人を輕蔑す夫のみならず肝心の來客さへ疎末な扱ひ中西の店は横柄だの彼處の店の者は因循だのと世間一般の惡評立ち商況の不景氣に加之へて一入増つた店の不繁昌甘乞小商人と賤めた富島の武力商花房の家より多くの金子を借入るゝ計りか果はその事の紛れより裁判沙汰罰金さへ取られた果敢ない始末是と申すも舊家自慢全く時世の變遷にお心のつかぬから起つた事今よりお店の仕方を改め万事舊弊を改るのみか尊嬢もお品行をお正しなされ切て帳面の附上げぐらゐは自身に御檢査あるはさるやう又お娘さまにも御教訓をお加へあそバされいつ迄も小兒のやうな所作をさせず一日も早く然るべき婿君をお迎へなされ家事の取締を嚴重におさせさせ同ド東區内の舊家中間で一番小さな家產と輕蔑められた本町の水穗のお店は當家と違ひ御一新以來俄に店の仕方を替へ舊家よ

長者よといふ由おき家格自慢は驕者と共ゑ斷然止て主管手代丁稚さへ上下心を一ッにして朔に商法に勉強するも名當家の爲には仇をする彼の花房を始め洋酒會社米會社の役員大東其他西區内で屈指の豪商等も吾を先にと取引して盛に商業を營まれ殊に一人娘のお菊さまも才色共に勝れたお方此樣申すと失敬なやうなれど此方のお娘さまとは雪と墨和漢の學問の其他に英佛獨の三學をも修められ品行も極めて方正ければ東區内の評判娘若この勢ひで成長したれバ男も及バぬ立派な器量日本の開明に向つて大きな利益を與へ賢女良婦の名を揚られ歴史にろの名を殘されさせう中西の家から水穗の家を見れバ別家分家にも齊しいものろの水穗の家の家風は取れぬなど驕慢な言語はお止めおされ元より御近所あり知合の中今から水穗の家と懇親を結び彼家の主管達の意見をも聞き一日も早くお店の御改革をして此米共西區の新米商人ゑ愚弄ゑされぬやう御注意なさるが何より肝心若このゑゝに因循ゑさらバ遂に此中西の家こ人の物といふ折柄店の小僧が走來り「こんな新聞をとさし出す繪入新聞お華は見るより顏を皺め

「妾の内ゝそんなものゝ嫌ひゆゑ注文する筈ゝないにといふ間に利兵衛ゝ新聞を手に取り「是ゝ今日初刊の新聞で無代進呈の印がおしてありますとやがて表面より中面を諦め挿畫とへひ印刷といひ大層体裁の好ゝ新聞紙讀で見たらばさぞ面白からふといひつゝ裏面の廣告欄内を眺め「頃來ゝ追々新聞廣告の効能が世の人に貫徹したと見にて賣藥や書籍の告條のみでなく種々な商估の廣告が出てゐると全欄に見わたして大に驚き「御後室樣彼の花房が御堂筋の天正の物理代人をするといふ廣告が出てをりまする

お花「ナニ花房が天正のと思ゝず顔を見合して互にホッと嘆息つきけり

第六回

印度の昔の説教に涙の珠を繰返す珠數商の法莚

御堂筋に年古く住ふ球數商の天野五兵衛商賣柄とて佛法好き今日も例月の説教日法生も果て同行が茶ノ子の馳走に預りながら追從交りの難有法談△「ヤレ〳〵難有や〳〵何と妙珍さゝ小松谷樣の御説教ゝ眞に難有いでゝござりませんか釋迦如來樣が牛馬にさ

へ身を換て娑婆の往來八千度難行苦行を遊ばして佛法をお廣め下されたるのお陰で此日本へまで難有い教が傳ゝり吾々のやうな無智愚痴な凡夫さへ阿彌陀如來樣のお慈悲お預り此樣な尊い御説教も聽けると云もの○「夫につけても厭ゝしものゝ耶蘇教といお邪宗の流行見るも汚らゝしい磔柱を拜ませて人ゝ血を流して死ぬのが本意と道に外れた教へを説き折角佛法の難有い教へで千餘年來凝固つてゐる人の心を打碎し果は此日本國をしてやる目算とやら然し吾佛法の教へでゝ虚無寂滅此世ゝ假の世此身ゝ假の身夢幻露電と説きたまふものをその假の世假の身の果敢ないもの、爲に他國の人と爭ふゝ由ないこと殊に忍辱和合ゝ第一の要義惜い欲いの塵の世ゝ少しも早く脱離して淨無垢け極樂淨土へ成丈急いで往生し阿彌陀樣や御開山のお傍で快樂を極め長和に暮すが吾等の本願△「長閑に暮をといへば此天野のお内御先祖代々御本山のお出入五兵衛さんゝ固より娘のお竹さん迄揃ひも揃つた慈悲深いお方お商賣物の珠數の數百八煩惱ゝさらりと休て只々一心一向お後生の願ひの他ゝなく大事な商賣事をも後廻しえし

て朝から晩まで佛法三昧御自分達計りか此やうに吾等までも呼集めて毎月屹度一回か二回尊い說敎を聽せて下さるとい珠勝といふて好いやゝ奇特と賞て良いやら大阪中での信心者夫に反對西區邊の御一新以來の出來星商人めが日本に害を與へる邪宗を信ドてイヤ實理だの發明だの電信や滊船や鐵道と現世の事にのみ屈宅して來世の事などい假ふも言ぞ只利欲の事ばかり云てをるい王法佛法の両賊といふ

もの然し西區の商人の中でも花房さんなんぞい少しは後生の考へも有お方御當家の事をバ種々お世話をなされ娘のお竹樣の事迄何彼と心を添へ今度はトウ〳〵惣理代人とやらをも務めゝるゝとの事アゝいふ深切なお方と親みを結ぶといふも如來樣の御引承せ何につけて也同行衆ありかたい者い如來樣だのうと感喜の涙を零りあぐれバ一同そゝろに隨喜して「アゝありがたや〳〵南無阿彌陀佛々々々

第七回

肝心の商賣い浮の空ある佛法狂ひ主人を見眞似に番頭の似非說敎

古語に曰く上の好むところ下これより甚だしきものありと天野の店いをのづから番頭小者にいたるまで上を見習ふ佛狂ひ手代の正助い帳箱を机替りに前にをき筆の軸にてトン〳〵と拍子木替りに打て立て麈もをかしき法談摸擬「コレ松藏おぬしい松藏といふ自分の名の理を知てゐるか汝の名を松藏とつけたは旦那様が深ひ思召の有てのこと霜や雪を凌ひで凋むに後れ千年万年の緑を保つといふ意味ではなく松柏碎けて瓦となるの比喩から出た無常の觀論人の命い老小不定朝に紅顔あるも夕に白骨となるといふ朝夕いたいくお文さまでも辨へてをらねは成ぬに今朝も今朝とて珠數の數をば三浦の大助の年と間違へ百六ッよむだい何の魯鈍今この正助が小松谷様の御説教に承はつた事のある珠數の講釋を聞してやるから恭しく聽問しろ「そも〳〵珠數の數の百八たる因由い七十二候に二十四氣を合すれば則ち一百八となる此數を用ひて百八とい定めたるものなり此を朝夕手首に掛て佛を拜し後生を願へばその功德廣大にして極樂往生さら〳〵疑ひある可らず殊に當天野のお蒙の如きいその難有い珠數を商ひ現生を送り

後生を助かるいよく〳〵佛法に緣のあるお家その商賣品の珠數の糸の緣に繋がる親類緣者出入の者まで濟度して蓮の臺に乘らしてやらんと此正助が弗留邪の辨舍利弗の智を揮ふて説諭れども傷ましい哉一切衆生い井戸へ落たる籍同樣救いんとすれども尙沈むい全く耶蘇宗の爲に欺かれ且い現生の利欲に迷ふからのこと邪宗に迷いず利欲に惑いず朝夕念佛稱名の課業に小

しも怠らず只一心一向に後生を願へば極樂往生い此正助が印紙を貼用して請合ものなり南無阿彌陀佛々々〳〵〳〵ホイ松藏め何時の間にか逃て仕舞くさつたェ、こんなことをいふていをられぬ今日い惣理代人の花房の旦那がおいでにある日だから店の掃除をせねばならぬに肝心の相方の松藏めに逃られてい雑巾がけをさせることがならぬコレ〳〵松藏々々いどこへ行た松藏々々ハテ是程呼のに佛とも法とも言ぬのい往生したか成佛したか何いともあれうるさいものい塵の浮世垢の蜚婆でいあるぞいといひつゝ箒を採て店を掃出しながら又も口癖に南無阿彌陀佛々々〳〵

第八回

内輪の不如意を包まふとして却て身上の衰退を顯す天野の家の表圍

花房の手代新七が多勢の手傳ひを使ふて天野の店の半分を板圍にしかけてゐる處へ天野の手代正助い顔色蒼て出來り正助「チイ〳〵花房のお手代新七さん此天野の家の表圍い誰の許可を受て成されるのぢやお前の御主人花房樣へ當家の惣理代人い依賴したれ

ど夫い主人と主人が懇意上より親切づくで成立た話此天野の店の商賣の妨害になるやう表圍をしてくれとい賴みも賴まれもしない筈客の出入の多い店先を板圍をるといふ無法千万仮令主人が承知しても此正助が默止てをりませぬ夫とも遂てと無理を云ならば恐れながらと交番所へ出掛けても白い黑いをつけて貰ふのぢや夫でも強て圍ひをするかゞ腕をまくつて詰寄すれど手代い少しも阿容たる色なく「成程主人の話に違ひず道理も法律も分らぬと見ゑ理も正さず警察へ出るとい前後分らぬ無茶なお手代此ういふお方が店を預りあとい御老人と女子計りでい日に増し家業の淋しくなる道理コレお手代さんそんなに髭と鼻を仰向けて憤怒でゐる計りが能でもあるまい夫より手近い今日の新聞の廣告欄内を御覽なさい一旦主人と主人同士が惣理代人に成てくれオヽ成りませうと互に約束狀を取替し立派に新聞紙に廣告まですればいよしや私の主人がお前の主人の家藏諸道具を賣拂ふても夫い惣理代人の權内にあること増て店を半分板圍にする位ゐい朝飯前の茶の子同樣家を殘らず打破し空地にするとも夫い私が主人の心の

儘を夫お前が故障を云たら所謂愛顧の引倒し却て双方の爲にあるまい 正助「イヤ道理か法律か知らねども此正助ゝ默止てゝをられぬ元來お前の主人の花房といふ人ゝ此天野の身上が左程に成たのをくうか舊の盛大に回復るやう親切上で世話をしてやると老年の主人を甘く胡麻かし無理に後見とか代理とか賴ふもせぬのに自分で名をつけ今更無法な此扱ひ人を馬鹿にするにも程のある誰が何と言ゝも堪忍せぬのぢや 新七「ハヽヽヽ、理の分らぬ言分にも程のある夫程私の主人の所置を嫌ふなら何故約束せぬ内故障を言ぬのぢや命代りの調印をでした上で今更グヅ〳〵云のゝ十日の菊益にも立ない恐痴をこぼさずに内へ這入て身分相應丁稚に小言でもいふが好い 正助「イヤ何といつても不承知だ 新七「物理代人たる主人の命令お前達の故障ゝ齒が立ぬ田作の齒ぎしりゝ止た〳〵 正助「イヤどうあつても角目立ち互に爭ふ其折から履首高く來かゝる巡査巡査「ヨリヤ〳〵何を高聲に爭論をするのぢや 正助「ヘイ此無法者めが 新七「イヤ此野蠻人が 正助「ナニ野蠻人とゝ 新七「人を無法者とい何のこと 正助「云たがどうした 新七「どつもからも入

るものか 正助「ナニ 新七「何だと 正助「ウヌ 新七「此奴めが 巡査「コリヤ〳〵二人とも靜にいたせといひつゝ往來の人立を拂ひ「コリヤ往來せい〳〵

第九回

弱の肉ゝ强の食とゝ言へど一時ゝ弱も强に勝つ天野と花房の手代の喧嘩花房の手代新七ゝ手傳大工に命令て家を取拂ゝせ夫等の人々が歸り掛る後尙も其處等を取片附け空を諦視めて獨語「頑固手代が邪魔を入たので思ひの外ゝ無益の暇入り冬の日と親の物いくれそもあうてくれるとやら今大工手傳ひが行たと思ふたにモウ三星が東れ空に現れた此樣子で見ると今打た學校の太鼓は九時と見ゐるあさと此身の歸り れ遲い故且那も定めて御心配ドレそろ〳〵と行にませうと行んとなしたる其折から天野の切戸をソッと開け顯れいでたる手代正助物をも言はで後ろ向方より手に携へたる割木にて新七の頭をグワンと一擊思ひがけぬき無法の手向ひ此方はいかでか黙かざらん怒りの聲も高やかに 新七「ヤア誰かと思へば天野の正助さだも野蠻の眠り覺めぬ最前

の爭論に遺恨を抱き此亂暴を働くか理の分らぬにも程のある正助「又しても野蠻呼はり主人ハ更なり此正助も後生願ひの信心者人と爭うハ佛家の訓誡と是迄辛抱していれば汝の主人ハ能い氣に成り人も無げなる無禮の擧動人の身上を吾物顔に盜賊同樣詐僞同前資本や商品を自由にした上家迄で打破したその返報汝の頭を打破して怨みの十分一を晴してやるのだ新七「成程さう法律にも道理にも少しも搆はぬ腕力談判夫程喧嘩か仕たゝからば隨分相手にならぬでもなけれども最前も最前とて巡査の說諭貴樣はおれを何と聞た正助「何と聞ても彼と聞ても巡査の說諭位ひには搆はない何でも今晚は汝を打き延して平素の怨ゝを晴すのだサア皆の者出て來い〳〵と呼はる聲にチッと答へて躍て用意の小僧下部手に〳〵得物を提げてバラ〳〵と露はれいで○「主人の家を横傾する花房の惡漢の差圖を受け△「吾儘を働く手代の新七□「主人の家を打破したやうに△「汝の頭も打破してやる○「覺悟をしろと右左と一時にかゝれを多勢に不勢さしも强氣の新七も防ぐに由なく手おめにさを新七「エゝ殘念や無念やと叫ぶ聲音も苦痛の息切

れ正助「是丈打擲れば平素の遺恨の十分一位いは晴したといふもの息の根止ては後日の妨害最う好い加減お勝閧揚て△○「チット合點と一同にドッと計りに高笑ひそのゝ本宅へ引取たる跡に新七は虫け息立つゝ由さへ遺憾し涙折かゝ此處へ花房の主おまり新七の歸りの遲さに若間違ひでもと人力車で驛つけ提燈の火にすかして見て花房「チヽ新七か新七「旦那樣天野の手代よ無体の手ごめ花房「チヽ皆迄でいふな呑こんだ汝の忠義は徒爾にはせぬぞ必ず共に氣を確かにといひつゝ車夫と諸共に新七を扶けて人力車に乘せそのまゝ天野の店の表に廻り雨戸も破れよとドン〳〵「花房で御坐る急用があつてまいりました

第十回

人の得意を吾物顔に鋭い爪で搔廻す鷲野の子分の木遣の稽故

大阪の船場の町の東堀土地の名さへ曲りとて直にハ行ぬ評判男羽風も荒く喋も爪も鋭き鷲野平五郎爲人足の一個の棟梁舊幕時代にハ手傳職ハ大工左官の下に就き同ド普請

方の其内でも派振の利ぬ職柄なりしが一新以后ハ建築請負業と名も呼變て大工左官石工屋根葺洗屋業さて部下につけて四區十六郡に追々得意の數を殖し大阪市中ゐ子分子方の住ざる町ハ仲間の内でも一と云れて二とハ下らぬ親方株の平五郎今日ハ仲間の參會ゐ出鬼の留主ゐる子分の雑談音頭の稽故もろつち退け

熊「此う吉やィ汝の今晩の聲ハ如何したのだ」

八「いつもの壜辛聲に

疋を掛て燒原を藥鑵と云ふの豕の遠吠と云ふか聲やうのない變痴奇ゐ聲だぜ是にハ何ぞ仔細があるだらう

吉「仔細も五さいもあるものか昨夜松島で勉强が過たからよ

熊「フン人に言ハれぬ先と思つて自ら名乘つて出やアがつたな

八「自首の件を以て罪一等を減じて懲役十年申附けるが聞て呆れらア

吉「權手前大分四角なことを知てゐるの門前の小僧の習ハぬ經を讀む格で隣家の代言先生の言語を聞き覺ゑか

八「吉の松島ぢやアねへが勉强と云ば内の親方だ尚年ハ三十になるかあらずて是丈の棟梁に成たと云ハ全く自分の勉强からだ

吉「夫ハもう云迄もねへ事ざがその勉强にハ一つの根がおるが知てゐ

るか 松「ウンニャ知らねへ 熊「どう云事だか話して聞せねへな 吉「又いつもの法螺だア否だぜ 樓「法螺ぢやアねへ眞實正銘少しも紛ひなしの話だ今から四代前の平五郎棟梁ハ三十三で早死をされたがその死期に臨で息子の平五郎親方を始め多くの子分を枕頭に呼つけ枯野の虫の聲細くでハない大幅な息をホット突て嗚呼止なん天なるかな命なるかな吾ハ遺憾に存ずるぞ 八「オイ〳〵 樓公說教か演說か譯の分らないそんな奥商のむつがもく成る言語ハ止てくれ 樓「オット東西交せる可らず 熊「汝が自分で交ぜてかいてかきやアがれ 樓「これハ閉口決して交ぜねへから神妙に聞なせへサテ棟梁の遺言にハ若己が長命をしてゐるならば豫ての大望を必仕遂げ大阪中の普請方を悉皆己の地盤にして市中ハ勿論方々までおらもる得意場を造へ樣ものを疾病と壽命にハ勝れねへ汝達ハ己の志しを繼傳で勝手の惡い棟梁の出入場ハ金力で買取り强情な棟梁の持場ハ腕力で奪取り一代で行ずハ二代も三代も孫曾孫玄孫の代迄も此二道を能く守り飽迄で稼業に勉强して必ず己の目的を遂るやう是さへ仕遂て呉れば念佛讀經の追善供養をして呉るより百

層倍の佛事だからと言て置れた言葉を守り今の棟梁迄丁度四代金力と腕力で得意を廣めトウ〳〵今でハ此勢ひ 吉「鷲の印紋天を見て何處の普請方も恐れねへものハ一人もねへぜ 松「おまけに今の棟梁ハ年ハ若く呉が好て金持で 八「それで女が惚るなら仙臺伊達の殿樣が三浦屋の高尾を殺しやせぬかポカン〳〵 樓「又八の野郎め横町から飛出して話の腰を折てしやアがつた新聞なら以下次號と此處等で一段書仙る處だが己等ハろことを一番ヲッ耐へて最う一くさりやらかすべいエヘン今の棟梁ハ男が好うて金持でその上年が若くッて勉强と强氣と金力と腕力まですべて先代先々代の棟梁に立增りお負に色事師まで一味加へて 熊「生姜一片水一杯半煎方常の如しか 樓「コレ〳〵又か止してくれ折角八の方へ鎭火口をかけたと思つたら又熊の方から火の手を揚やアがる 松「今度ハ汝が惡いのだ何故と言て見や色事師まで一味加へてと此う云だすと是非生姜一片や酒すんばある可らずだ 樓「オヤ松ハいつの間にか漢語を遣ふの 八「大方唐物町の中西の娘が感化たのだらう 吉「娘と云ば川向ふの水穗の娘のお菊子も隨分髮りものぢやねへか 熊

「女のくせに琴三味線を嫌つて英語だの佛語だのと何だか理の分らねへ〳〵の勉強」「噂を云い影とやら又例の陳腐漢を始めたせどんな事を言てゐるのか少し部にして聞て見やうぢやアねへか」一同「ウン好らう〳〵」

第十一回

蟹の這ふ横文に眼はさらせども心は直な水穂の娘が洋學の勉強（上）

才と色との両がら世に聞ゆる水穂の娘お菊い今宵も川沿ひの二階の書室に只一人机に對ひて夜學の勉強川向ふの蘆野の内の音頭も漸くゐ靜に成り聞ゆるものは逝く水の晝夜を楽ぬ音ばかり是から妾の勉強時と蘭燈の心をゝさゝか捻上げ又讀みさしの文明史を三行四行讀む折しも紙障をソットひき開けて徐々入りくる乳母のおさん「お嬢様まだ御勉強で御坐りやするか餘り御勉強も度が過るとお身体の毒ゐなるとのこと學問も智恵も命のおればゐろ貴女も少し御保養を成されやせ」お菊「チヽお三ゐ前が例もの其親切女は親の様に思ふてをりやする學校の教師様のゐ話にも教育ゐ智育德育体育

の三ッがおつて智德の二ッは精神の教育又体育とい運動養生人の身体を壯健にする教へ如何に精神の智德が勝れたればとて肝心の身体が虚弱く成り二十代や三十代で蚤死をしては何にも成らぬ維新前い日本も武藝が世に行はれ其武藝を本業とする武家計りか百姓町人にも自然其風が感染て劍術だの柔術だのと稍体育の云ものがあつだが御一新後は武藝は廢れて地を拂ひ加之に馬車や人力車が流行りだして歩く事さへ稀なれど上下一般押なべて運動い漸〳〵に少くなり体育といふ事は全く絶たといふやうな姿夫にひきかへ精神の教育い洋學の緻密たものが盛に行はれ加之へ人間の交際も農工商の業務も日に増し月に添てむづかしくなる計り其故近頃日本人にと腦病だの肺病だの心經病だとの種々難治の疾病が多くなり兎角蚤死をする人が多い様子命が物種とい野蠻な時代より世に言ひ傳へた古い諺増して文明の今日に生るゝからい身體の尊い事を知らねは成らぬ故昔の武藝に似通ふたやうな事で衛生法に害の無い体育を世に行はねばならぬ次第増て女は惡い習慣も有て自と運動を欠く者なれば尚更衛生の事に注意せ

ねは成らぬと時々難有いお教諭も
ゐ妾も成丈け精神の教育と身体の
保養の權衡を程好くせんの心得な
れど汝も知ての通りの水穂の家先
祖の代より此妾まで數代連綿と血
統續き此大坂中にも稀なる家格是
迄n肝心の米商も本家ではせず江
戸堀の出店へ計任せておき番頭の
徳助に万事の委任主人は只々和歌
よ蹴鞠よと潜上の遊びにのみ耽つ
てゐたれど妾の代に成てからは時
世も違へバ主人が直接に商賣の掛

引得意の交際もせねバならぬ故女あがらも晋通の學問を脩め歐洲風の商法を營むやう
にせんと思ふ計りよ此勉強然し成丈け氣をつけて度を過さぬやうする故にトウゾ心配
してたもるなといふも優しき言づかい心の實直も露をて最愛らしくぞ見なにける

第十一回

蟹の這ふ横文に目nさらせども心は直な水穂の娘が洋學の勉強(下)

お三は尚も膝を進め夫は好いお心掛け貴女も夫程養生の事にお心がついてたいで遊バ
をなら妾も大きに安心致し升然る貴女が此う人に優て文明開化とやらにお進み遊ばゑ
ましたも元はと云バ教師の雨森先生のお蔭眞に彼のお方は御親切なお方でござります
雨森先生といへバ貴女の豫てのお話日本人は古來の習慣で早婚する惡い風俗がある
がまだ身体も調はず智識も熟さない内に子を產むと其子の虚弱のは云ふ迄も無く自然
教育も不完全な理もゐ世の文明を進める爲に大層な害を與へると雨森先生の教諭もゐ
二十五ぞでと思ふが夫では餘り盛りが過ると親類の者の意見もあれバ二十三の春ぞで

い婿は持ぬ婿を持た上は尙身代の改革をするとのお話ですが只今のやうなお身持で御勉強なされましたら二十三にある迄には東區内で貴女の上を越す娘御は一人もおぎりますまい其時の事を想像ると嬉ふて〳〵乳母も何とやら鼻の高いやうな心持夫につけても心にかゝるは川向ふの鷲野の棟梁といひつゝ四邊を見廻して　お三「貴女をどうか目懸てゐるやうすと近處の人の專ら噂さ　お菊「夫が眞實なら畏らしい話だねへアノ棟梁は自分が威勢の好いのに任せて義理よも法おも搆ハないでやゝともすると壓制な事や暴逆な業をするとの評判ドウゾ强迫けな相談でも仕かけて來なければ好いねへ　お三「貴女の仰しやる通りアノ棟梁ハとかくよ壓制な眞似をするので世間で彼是と惡くいふ計りか子分の内おも不服を云ものがあつて既に前方ハその配下お就てゐた甲乙も今は虛無僧イヽヱあの尺八業とかいふ者に身を變へ何でも棟梁に意趣を反すとの云で彼是ろの下拵へをしてゐるとやら夫と云もあんまり强い自慢が過るからのこと　お菊「强いもの勝な世の中もろ成丈け向ふの無理を除て通し相手にならぬやうするが肝心　お三「夫は貴女

の仰しやる通り此間も鷲野の所有の隣の空地に有た小さな石然も其以前ハお店のもので有たとか云のを持て來てお店の地面の地境に置てあつた大きな捨石と交換て呉ろと無理お相談若否だと云たゝ例の暴逆子分子方を寄越してどの樣な亂暴な事を仕やうも知れねばお前の御無理は御尤と向ふの言狀通り替てやつたとお手代衆が妄へお話「世の喩にいふ乞食ゞ捧打とやら成

丈若情を造らへぬが好い夫に附ても今お前のお話の妾への懸想一條夫が眞實なら實に氣味が惡いねへと語ふ折柄水に響さて又も聞もる川向ふの鷲野の子分の木造の稽古、ヤンレ引け〳〵ヤアー」お菊お三「エヽ喫驚した

第十二回

其爭ひい君子にあらぬ丁稚同士の大喧嘩も開進と頑固の異見の車輪

近來い就中縱覽人の多くなりし博物場の賣品室にて第一等の位置を占たる中西の支那品店のすぐ隣りに小さけれども世間幷に店を張つたる朝川の籠甲店へ忙しさうに遣て來りし水穗の丁稚進吉「モシお店に束髮留い御ざいませんか內のお嬢樣がお指しになるのですがと云はれて店番をしてゐりし朝川の丁稚は頭を搔き寬太「私の店ふい束髮留いござりませんお前も知ての通り若且那は當世好でゐゝいふ品い成丈け仕入ておくと仰しやるのを親且那い大の舊弊家でまだチョン髷を載てゐるやうな始末もゐ束髮どころか東京風の髮さへ大嫌ひ實に店中が持あまして居るのさといふ橫合より一人の丁稚

次「只親且那の舊弊家な計りで無いといひつゝ隣りの中西の店に指をさし小聲に成りて顏を玄はめ「實い彼處の店で時々家事向の世話にゐるので彼處の店では本家顏を振廻し兎角己が店の頑固風を此方の店へも吹せるもゐ流行物の仕入ゐどいどうしても出來ないのさ」進吉「夫い眞實に困つたものだねさう舊弊頑固の寄合でい自然商賣も義微になる譯大きにお世話だがお氣の毒ゐ次第だと三人が密々語ふ折しも浮雜々々來かゝる一個の職人寬太長次の兩人い夫と見るより笑ひを含み寬太「サヽ喧をすれば影とやら評判の頑固野郎下職の鉄藏が遣て來た一番彼奴を惡弄て怒らせてやらう」長次「ソイツハ面白狸の腹づゝみだ然し水穗の進吉さんが一喧嘩にでも成て傍杖を打れると行ませんから中西の店の方へ寄てゐておくんない」進吉「喧嘩のお相伴を喰て溜る者かそんなら此方へ寄て高見で見物だと中西の店の方へ依る間もなく鉄藏い一抔機嫌朝川の店へ腰を掛け」鐵藏「モシ寬太さんに長次さん何故此頃い仕事をさせておくんゐさらねへのだ」寬太「させゐいと云のでゐい全く仕事が暇ゐのだ」長次「只さへ暇な處へ東京の新聞に束髮の事な

どを書て教唆るもんだから尙不の字を添るのだ鉄藏「ナニあんな事位が不の字を添るものかどこやらの新聞にも束髪をして日本服を被てゐる女い爲同様だと書てあつたが眞にあの通り東京の急進家にい一人や二人いあんな結髪をするものがあるかも知らねへが大阪の人間にいそんな急進家い樂にしたくてもありやすめへ寛太「處があるから仕方がない現在こゝにゐる進吉さんの御主人川向ふの水穂のお嬢さんなんどい大の西洋好で今も今とてその束髪留を買にお寄來しなすつた處だ鉄藏「アノお菊の急進家かあんな奴が束髪に結た處が誰が眞似をするものがあるものか長次「コレ〳〵鉄藏何をいふお出入先のお嬢さんの事をあんな奴といい鉄藏「束髪なんぞしやアがる阿魔いあんな奴いさておいて馬鹿と云ふが氣狂と云ふが搆ふことがあるものか寛太「さういふ貴様が馬鹿と氣狂だ鉄藏「ナニ己を馬鹿だと寛太「チヽ馬鹿を馬鹿といつたがどうもしねへかうするのだと打てかゝれば此方も負ぬ氣長次とも〳〵力を併せ一人の鉄藏を右左り打つ拗れつ不慮の鬪爭隣店の中西の手代い此体見るより例の得意の關沙主義本家摸擬

で中裁するかと思ひの外なる亂暴狼藉矢庭に傍に見てゐる水穂の丁稚の頭を一つ喰はする是を相圖ゑ寛太長次鉄藏までが喧嘩を止め突然進吉に打てかゝりアナヤといふ間も荒々しく三人が手込に進吉い大地へ堂と倒れしが同室内に居合せたる店番縱覽人諸共に此時漸く走寄て四人を左右に引分けり

第十三回

蝸牛の角茅立たる爭論も互ひの胸の堪忍に丸く收まる鉢卷の脫殼

家資分散の証文い朱書に赤く財産公實の點數い塗札に白く免許代言の風呂敷い多く紫にて三百代人の肌衣い大低鼠色に化し被告の病症い毎も痴氣に決り調査になる所有品い悉く他人ゑの借物富んとすれバ仁ならずと店賃請求の酷なるを罵る傭者あれバ本來無一物と悟りを開いて身代限りを屁とも思はぬ禪僧あり千差万別雨霰雪や氷と隔つれど落れバ同じ谷川の水其谷の字の訓にあるキハマル處い約定齟齬權利を爭ひ義務を責め互に職はを舌の鋒鋭口ゑ打出す鉄砲に傍聽の膽を寒からしめ鏢を削りし敵味方も

一朝和を議し訟を解ば原被両造一床几曲直正邪を爭ひて四角張たる眼も口も和解て丸き塗盆の一ッ土瓶の茶を汲て茶碗を讓る人民扣所今日土曜日とて新訴も少く不參屆や喚出し願も毎より早く事濟て思ひ〳〵に人い散りやゝ花落て訟庭閑なりと詩に詠じたる面影ある午前十一時二三十分頃暖掛の隅に腰を掛たる原被二人の手代と代人手代い本町の米穀商水穂屋の忠七代人い唐物町支那珍器商中西の仁助對決前に解訴狀を上げ出門の屆札に撿印を待つ、話す談も平穏に　仁助「水穂屋さんの方で穏和にお掛合ひ下されたものだから今回の事件も平和に事濟になり店の者も一同喜んでをります　忠七「コレハ〳〵お言葉で痛み入ります畢竟爭論の裁判のといふ事い互に心の置き處の惡いから起つた事強てお席を願つて互に法理を爭ひよしや下店の方へ勝利を占て損害の要償をお貰ひ申した處が到底入費倒れで諺ゐ云ふ算用合て錢足ずでも　仁助「貴店の方さへ左樣あれば增て下店の方ゐ否やはござりません只今卿のお說の通り万一勝訴ゐ成て損害金を出さずにすんでも夫迄の訴訟入費に損害金の上を越す出金のあるは知たこと　忠

七「夫とても他に何か止を得ぬ事でもあり店の暖簾に拘はると云やうな事あれば假へ令身代を入費に入ても白い黑いを分る迄法理に訴へねば成らぬなれど高が朝川の手代と當方の雇人と何か談判をしてゐた際に隣りに御坐つた貴家のお店のお手代が　仁助「サア一緒に手出しを致した段い重々恐入りましたが實此樣な紛紜の起りましたも元いと云へ朝川の頑固隱居が平素示しが好ないからの事彼後隱居を店へ呼つけ糺明さす爲めの二階住居下店で彼是朝川の世話を致すも舊來の交際　忠七「一種々御配慮の甲斐があつて無異に納り連累の朝川の店も大慶び　仁助「是と申すも佛闘酒製造會社の地面の貸借より非常の悶着訴訟入費に大金を失ひ懲々してゐる折柄といひ貴家のお店の事をお好みなさらぬ寛仁大度のお考へのお蔭　忠七「時に書面を出してから最う餘程になりやすが出門屆を督促ませうかと話す折から桁木カチ〳〵　仁助「最う掛官のお退散の時間一寸受附で尋ねませう　忠七「左樣ならば御一所に　仁助「ナイ履物はいの二番

第十四回

智力と金力とに逼塞られたる天野親子が裏屋の愁嘆

旅に病で夢ハ枯野を驅めぐりと末後の一句を世に遺せし俳師芭蕉の終焉の地御堂裏の花屋裏へ浮生の旅の疲勞足四百四病の其外の疾病に責られ身代ハ漸次に痩て左前本宅を右に曲りたる抱屋敷の借宅に逼塞なしたる天野五兵衛此世を吾世と榮耀し昨日の花は今日の夢桐の一葉に秋立て地券一枚散初しより有ると有ふも千草百木公債證書株券貯金漸次々々に枯凋み果ハ家屋さへ宅地さへ悉皆人の所有となり器具も一ツ二ツ賣り遂に土藏さへ加藍堂手代了稚に下女下男さへ追々暇を遣ハして今は親子に下婢一人大きな家に住むも無益と此家へ移りて無業活計五兵衛も今ハ世の望みと共に頭髮を剪すて、娘お竹を名前人自己ハ頓て土となる身と覩念めその名さへ土齋と呼替へ平生好める佛いぢりを身の勤め惣理代人の權

內とて人の家宅に板圍ゐせし花房國三が理不盡も今ハ却て先見と世間の人に褒らるゝ哀はれ果敢なき身の体裁頃しも水無月中旬にて本年ハ例より特別て耐ぬ暑さの午後ごろ娘お竹ハ最寄の浴場にて一汗流して歸り來り褌のまゝの團扇遣ひ安息香を薫らして坐禪を組たる父に向ひ「お竹」「ヲヽ暑い〳〵此家ハ大陽が眞正面お刺すから熱くて耐らないと云へ土齋はうち點頭き「表通

りの本宅と裏屋住居の差違ひあれど先祖の代から此地の居附き本宅も此扣屋も然い住居に變りは無れど本宅ハ廣いもあ少しハ此處より凌ぎ好つた夫に附ても思ひ出す手代正助が前後見ず花房の手代新七を打擲したが原因になりアノ花房氏より厳しい談判素より天野の家の惣理代を任したからハ何事も總てアノ人の心任しどう仕られても仕方がない箇夫をとやかう故障を云たい元より此方の無理なるに其上無法のうち打擲然も其疵が病ひの根に成て花房の手代ハ到頭病死若之を表沙汰にした時にハ殴打創傷死に抵るとやら六かしい法律に當られて正助は更なり主人の己も敎唆に落て重禁錮とやらにも成るべき處をやう〳〵賴んで内濟私和是から家事には口を入ぬと厳しい誓書を入て此身は隱居家名は汝に切替て地面居宅借屋さで花房へ托して此處へ逼塞今では眞のあてがひ扶持親子が其日を送る計り是と云のも其原ハ吾等を始め手代小者さで文明といふ事をば少しも知ず只々佛法ゐのみ凝固り無念無想してゐた身の罪科自業自得とは諦めてゐれどつひ妄想から愚痴が出る吁々南無阿彌陀佛々々〳〵々々「又お老爺の

愚痴とお念佛が始まつた時世時節なら仕方がない始めて花房さんと取引の時一時の融通にさし支へ地券一枚書入て百圓借たが繰の糸夫から漸々〳〵百二百果は千圓五百圓と借る度ごと此方の權利を向ふに取られてドゝの到底惣理代人の名を占ふれ今では天野の家名家督も人の物やら吾物やら理の分ふぬ果敢ない始末是と云のも阿爺の過失平素信心している阿彌陀樣お釋迦如來も聞ゐぬ始末と云つゝ路次をうち諦視め五兵「チヽ呼ぶより誘れとやふ花房さんが路次口で今人車から下るところチィお竹や着物を早く持て來ておくれ

第十五回

水揚仲士が烟草休みに烟にひとしい浮世雜談

千代萬世水も涸せど一系に流れも清き東堀家の名に負ふ米問屋水穗の家の濬藏へ數千の俵を上荷船より水揚を爲る米仲士が烟草一休れ江湖雜談○「此店の仕事をして此店の事を賞めるのハ何だか胡散をするやうに聞ゐるが此水穗のお店は近年さでは東區の

内でこそあれ西區の方などでは餘り人にも知れなかつたが△「僅か此の十八九年ごメキ〻と見上げる計りに身上を仕揚ぶ今でこ此廣い東區の内でも一と言れて二とい下らぬ主管手代の番折は元よりいふも更ながら一つい當主のお嬢さんが文明開化にお氣がつかれて商業もお店の仕方も改められ何彼に勉強をなされたからの事」是さで東區で中西と朝川翁屋の三軒の其他は西區で紅粉屋の茂平さん計り舊來の取引とて交際ふてゐたが今でい教師の雨森さんが親切の說諭で手を廣け西區の烈しい商人共とも取引きして漸次に稼業も繁昌ふして商標の記號の日の出の勢ほひ ○「夫に引返へ同ド區内で舊いお店の取引先問物町の中西の家などい家格自慢で威張てゐるが内々その内幕を聞合して見ると暖簾い古いが持主は是迄度々變つてゐてほんの中西の家名計りそれで舊家だ大家だと朝川や翁屋を分家扱ひ △「ところが此お店と翁屋とは全く本家分家の緣故のあるので翁屋の當主の猶吉さんが若輩者ゐ乏營業が出來ぬとお店へ賴んで仕方の改革餘義なくお店で萬事を擔任け今でい手代が勤番持」□「夫を中西の番頭が根ふ持て此

間も博物場でお店の進吉さんを朝川の丁稚と手を組で打ち打 擲 此前も大半一件でお店の大番頭アノ利兵衛さんに談判され内濟金迄取れた癖ふ性懲もない此度の亂暴 ○「既に裁判沙汰ふもなる所をお店の御支配人が平和しいので漸う是も示談の相談中西々くゝと威張てゐるか其内證い左前西區の出來星商人に借が出來たと人の噂 △「やがて御堂筋の天野と同樣始めい新平民と同ドやうふ否がつてゐた花房やアノ大東の俄富限に身代を殘らずしてやられお氣の毒ふ姿になるだふ」□「チヽお氣の毒といへば向ふの方から其お氣の毒があるいて來たとい」□「お氣の毒とは向ふの方のら」△「傘で日を除けて來るアノ娘か」□「ムヽアノ娘サアノ娘は今御堂筋の天野の娘た」○「ナニアノ十錢も宜しくといふ造への娘か」△「名高い珠數屋の娘のお竹だと虛をいふにも程があるぜ」□「イヤ虛ではない今では後見の花房の妾をしてゐると近處の噂」□「後見は後ろ見をするのだと思つたら娘の前迄見るとは大笑ひだ」○「家事向き萬端を委任したと聞たもゐ三年立つか立ぬい内ふ大方花房の者になるだふ

ふと世間の人が言つてゐたが實にその通りよ成果て揚句の果に娘さを委して仕舞へゞ世話はねへと談話中央へ天野の娘多くの仲士が高聲に吾名を云ふに氣愧かしく水穂の店の本宅の格子の方へ身を寄てこそ〳〵通るその折から娘お菊い何氣なく窓の障子々細目に明け表を諦視めて圖ゝすもお竹と顔を見合をればお竹はハッと傘に顔藏くして過る後ろ姿見送りながらホット嘆息

お菊「アレは天野のお竹さん一ッ稽古所へ行た時には妾が知らぬ琴の手を敲へて貰ふた事も有たにアノ見すぼらしい今のお形仲士の惡口か知らねども花房の妾をしてゐるの密賣淫をしてゐるのと聞くも憐れなお身の上お氣の毒とも不便とも言はふやうない不幸薄命どうか救ふて上たいもの夫につけても世の諺人の振見て吾身とやらアゝ油斷のならぬ世の中ぢやなア

第十六回

昔の愚痴を繰返す珠數商の主人が玉の涙

ながらへばまたこのごろや忍ばれんうしと見し世ぞ今ゝ戀しき昨日の榮華は今日の夢名のみは華美な花屋裏ふ浮世をかこつ天野の親子さらでも悒鬱き痩世帶に涙を添ふる夕蚊遣り煙りをあふぐ涼團扇それ〴〵へ破れて骨のみなる腕をながめて頃痩と答へて後い涙かな古人の發句も身に沁みてお竹いそゝろふうるゝ壁「アノ親父さん此間花房さんがおいでの時又一條起つた百五十圓の預り金の嚴しい催促出來ない中から工風して

無理ゐ五十圓だけ調達して渡した跡の殘金百圓明日限りと當の無い約束だけの當座免れ然し何とか卿の胸にお金の出來る工風のあるのか妾は眞に氣がゝりなと言へば土齊は手拭にて額の汗をおし拭ひ「私ぢやからとてどういふ考へもなけれども全体彼の金は正助めが甘く花房の辨まへに欺かれ封印のまゝで使用せぬ拘り證文の入れておれば此一件のみは惣理代に任せて置く事ゝ出來ぬ次第まかり間違つて預け主の松野どのが撿事へ告訴でもしられた時は委托品使用とやらんふ法律に當られ身代限りではすはぬ一件夫故是が非でも金策して屹度お渡し申しまするとと花房さんへ嚴しい約束をもしゑとんふもの汝も知つての通りの今の手許七處借てやう〳〵廿圓その餘いあけおしの衣類諸道具殘らず典物して三十圓併せて五十のつばめを合して渡した跡の百圓なればとても工面ゝ出來ぬあれども然ともいへねば據ゐろなく延ゐ日限も最う一日おんまり氣を揉で精神に痲痹が來たやら茫然して今では心配も何處へかいりたやうな」「サアそ

の預け主も能く聞ゞ矢張り花房さんの緣家とやらで花房さんさへ骨折る氣なら何如と

も談話のつく樣子夫を却て當方ゑ向ひ代言口調の厳しい催促然し面心に水情と妾に向つて猥褻らしい妾になるなら己が手許から殘金百圓をは償ふた上に阿爺も生涯不自由なく世話して遣うとをかしな相談劇場淨留理物の本にも家と親との二つの爲にゝ娼妓ゑ身を賣る例もあればいつそ花房さんの言狀通りといふを打消し土齊ゝ嘆息「その心志は嬉ゑいけれども此東區では舊家大家の五本の指とまで數

へられた此天野の家の一人娘を金の償ひ方に妾をさせては先祖と暖簾へ土齋がすまぬ

お竹「元より妾も仕たくハないがお前がいかにも最愛しいから昨日も昨日で反古の中から銀行の當坐預けの二百圓の受取券を見だした時お前が涙ながらの一人語若此二百圓を預をておいたら今度の一件の百五十圓をすやしたその殘額でお竹の盆暮の賀受して先祖の佛事も勤めやうものとおいひなされた纏言を疊縮した顏で聞てゐた妾の心の中のその切なさ胸も裂さけるかと思ひましたとワッと計りに泣入れは土齋とおいて、有を撫で土齋「今日はいつもと譯がちがひ愚痴な己より汝が愁嘆己に涙を落させるアヽ思ふまい嘆くまい南無阿彌陀佛々々々といふおお竹ハ顏を上げ お竹「ナヽ泣てゐる間も氣がヽりなお父さん花房さんへ何といつてやりませう 土齋「ナヽ端書でも遣つて此方から斷りに行くとしやう然し一錢あるか知らん確か天保錢が一枚佛檀の抽斗にあつた筈だが二厘足りないには困つたものだといふ折から晩風が軒端に音信て釣り下がたる風鈴が鏘然 お竹「お父さんソレ彼處に二厘錢が

第十七回

夜店歸りの白雨々に降て漢たる水穂の娘の不時の災難

殘暑を洗ふ白雨に夜店も人も散果て僅に殘る植木商の店さへ今は迹も無く軒端を傳ふ雨滴のしぶきを除て佇立む女は水穂の娘のお菊と乳母お菊は乳母を見返りて「何故長松は飯つて來のぬだらう 乳母「定めて今夜の雨立で夜店崩れの大雜踏人力車がないので探してをるのでござりませうと話す折から内平野町の神明前を東の方より出で來しは大形の浴衣に三尺帶牛肉店の貸提燈を携たる乞問ねぬ知るき防火丁夫姿普請場調子の高話「此間の火事ハボヤで濟さうと思つて骨を折たがトンダ大事にして仕まはた、さうよアノ時己等は纏を持て火元の隣家の屋根に居たが喞筒の先が面の正面お當たものだから痛くつて耐らなかつた「己等ハ又右隣家の内の大黑柱へ斧を入に這入て痛い目お逢た「痛い目と云ばアノ時も消口より四五軒も先の内へ斧を入た奴が有たが入られた内こそ大迷惑「彼と云も鍛冶屋の手間取やら桶屋の職人が防火丁に成ているからよ

「夫だからヂンヤンと鳴ると小林の隊長や淺野の親方い火のやうに成て氣を揉むが實に尤もな理だと言つゝ歩み來りて軒下に佇立むお菊と乳母を提燈の火にすかし見て何か互ひに點頭き合ひ「モシお嬢さんお傘がなければ此中へお這入んなさい「私等がお店までお送り申しませうと言れて乳母い薄氣味惡く「ハイ難有どざりますが今丁稚が車夫を呼にまゐりましたから追てまいりませうといふ間に二人は尙も摺寄り「ナニ御遠慮には及びませんサア御一處にお伴んたしませうとお菊の手を取り引寄するその手をお菊ゝ振り拂ひ「ナニ御遠慮い申しませんが卿等に送りて頂く理がありませんからと云も鋭どき言語の調子平常雄々しき性質とてかゝる時にも尋常の娘に異なる身の動作二人の男は右左り「理も糸爪も入るものか此ういひ出したら是が非でも己等二人が連て行と云て、一人が抱きすくめ一人い肩なる手拭にて壁立てさせじと猿轡「アレ泥坊と乳母お三が絶るを丁と突飛し既に逃んとする處へ雨傘二本を手に持て水穗の丁稚長松は花房の手代と二人連「今夜い俄雨で人力車の種切れ大きに困つて

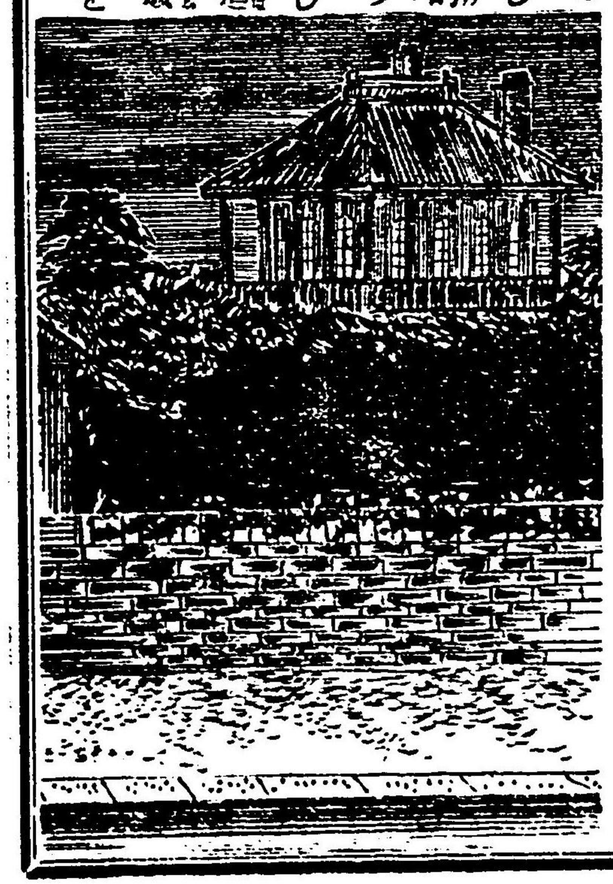
ゐる折柄幸ひ卿樣よお目に懸り通連會社で此通り傘の二本も借ていたゞき眞お僥倖を致しましたと言ゝ何の心もなく來かゝる向ふの軒下より二人の火丁はお菊を抱き驅出る途端に衝突り互に吃驚たち〳〵火丁は抱きしお菊を放し花房の手代と手に持たる提燈落して四邊い暗黑「長松「お乳母どん「乳母「チヽ長松どんか「長松「お嬢樣い「乳母「今泥坊が「手代「ナニ泥坊だと云つゝも互ひ探るその折から雨休み雲の絶間よりやゝ漏れいつる月の影お菊に乳母と丁稚の長松手代と俱に顏見合せ「チヽと驚く壁方早く横目指して逃行く二人「オノレ泥坊と花房の手代は逐行くその足お觸りし木札を手に取上げ月の先りにすかゝて見て內本町橋詰町建築請負業鷲野平五郎配下職人一人と讀終つて小首を傾け「ハテナ

第十八回

父母いかゝれとてしも烏羽玉の夜道に濡る情の切貫（上）

あか〳〵と日いつれなくも秋の山いつしか暮て足元も小暗くなりし黃昏時瓦屋橋を急

促と西へ渡るハ唐物町の中西の手代文七東へ渡る一個の男と行違ひさまに詞をかけ文七「ナヽ久藏どんでハないか久藏「ナヽさう云ハ文七さん大層遅く成たなア文七「貴公も知ての通り天王寺の勘解ハ難波村と高津新地と長町といふ御難の場所を扣へてゐるから損料蒲團や人力車の輪代の滯ほりと云やうな屁鋒勘解が多い處へドウセ此方ハ不調にして本訴を受た揚句の果て六十日の猶豫のある内控訴へまでも持出して其内に何とか手段をつける目的だから其時の苦情の種にと知りつゝ故と無理を云ゐ係官も憎しみぢゝると見ねトウ〳〵最終に廻はされたからやう〳〵事ぢ濟で腰掛へ返つて見ると辨當屋ハ履物を



併べてとうに返つて仕舞ひ丸で閑子鳥でも啼さうな景色時計を見れバ五時さぢり時に今日ハ中の島や土佐堀ハどう云摸樣であつたか知ん久藏「確乎ハ聞ぬけれども始審の方ハお掛りぢ急病で御出勤ぢ無く追てとの事で下ふれたといふ囘又控訴の方ハ原告ぢ洋人と來てゐるので如何に免許代言の法尾律三君でも少し手子摩てゐる樣子然し今日ハ當方の旗色ぢ好つたといふ事だ文七「夫ゝ大きに結構な話夫ハさ

うと久藏どん今頃お前何處へ行くのだ　久藏「何處の此處のといふて詰らない居中の番頭手代が代言家の書生のやうに勘解の本訴のと毎日のやうに裁判所通ひ返答書だの上伸書だのと二六時中に筆の持づめ其間にハ示談に行たり又ハ貸金の催促に行たり朋心の商賣する暇もないのに御後室樣にハ例の遊び好きゝ居の棧敷を取つて來いと夕飯の箸を放すが否や私への命令夫さへあるに丁稚でも好い女髪結の催促さで重荷に小附おさけにお孃さんさでが夫を見眞似に次手に上町の小間物屋へ寄て來いと泣面に蜂の急ぎの注文如何に雇人だからとて使ハなければ損だといはぬばかりに此う逐ひ廻はされてハ叶ハない　文七「畢竟利兵備さんが理の分つたお方もお皆なが辛抱して勧めてゐるのだ　久藏「それだから少し氣の利た手代ハ引負ひをして放逐されなければ自分で隨意寺　文七「裁判ハ日増おかゝる計り　久藏「内憂外患交々集るとハ此ゝふ事　文七「財政困難百事多端危急存亡の秋と云べしかなアハヽヽヽ　久七「イヤ笑ひごつてハない御後室樣とお嬢さん計りなら己等ハ眞平だ　文七「贅言を言てゐる中ゑ眞闇ゑ成て來た早く歸つて湯にでも

這入らふ　久藏「自己も行ふと互に別れて足早に久藏ハ東へ文七は西へ渡りて長堀の方へ足を向けたる其途端傍の家の軒下よりソット立出る一個の娘後の方より文七の袂を執へて聲低く　娘「モシ貴卿お遊びなさいまと言れて此方は喫驚し　文七「エヽ膽を潰した自等ハ汝等と遊ぶやうな者でハないと云つゝその手を振り拂ひ五歩六歩足早に行き過ぎながら獨語　文七「此處等へ淫賣の出やうとハ今日の今さで知らなんぞ昨夜千日前で二十人餘り拘引れたといふ噂を先刻腰掛でしてゐたものが有たが夫で此邊へ巣を變たか知らんといひつゝ腰の周圍を探つてハット驚き「ホイ矢立が無いアヽ失敗たとへひつゝ後へ二歩三歩戻る向ふへ以前の娘矢立を持て歩み來り「只今彼處で拾ひさしたが万一貴郎のお落し物でハと差いだすを受取て「ハイ是ハ憚りさまと一禮述る其處へガラ〳〵驟來る腕車の提燈の火に顔見合せ　文七「ヤヽ　娘「ヤヤ

第十八回

父母ハかゝれとしても鳥羽玉の夜道ゑ潜る情の切實（中）

瓦屋町の何番地おやしの路地の裏長屋井戸の向ひ厠屋の隣り下には猫と老婆一人四疊の二階四方壁襤子ゝ反古の打附け張り油煙に煤びし丸行燈ゝ故とがましく薄闇く敷て卷りし敷き蒲團の傍に手を組ミ坐りしは彼の中西の手代の文七泣居る娘を慰さめながら「お竹さんそんなにお泣き遊ばして下の老婆が聞き耳たてチッに氣取るといけませんからもう〳〵泣くのはお止めあろばせ只今のお話で貴卿のお身の上の委細の事が分りました實は最前人力車の提燈の火で圖らずも貴卿のお顏を見た時は餘まりの事ゝ膽が潰れて貴卿のお驚きより此文七が迚やうとまで思ふたくらい是迄世間の評判に天野の家と花房に押領され嬢さんまでが花房の妾に成てお出だとゝ度々耳に聞きましたが御隱居樣と貴卿のお扶持方ゝ御隱居の名前の時分に手代の正助が法律に背いた証書を入で御隱居に内証で花房に幾許の借財のしておつた故夫を返濟の爲め月賦の代りに果ゝ僅かの扶持方まで取上らゝと今では日々の活計も出來ぬい處かなら御隱居の前をば程好く言ひ做し毎晩内を出て淺麻しい此稼業をなさるゝとゝ夢にも知らない事で有まし

た」お竹「家の活計と父上の病氣の手當ゝ事を欠き夜業仕事ゝ或茶商へ茶撰ゝ雇はるゝと程好くつくろひ毎日薄暮から家を出て此處等邊へ立ち君の往來の人の袂を曳き僅か十錢二十錢と心にあらぬ情の切賣文七「私がまだ白雲頭の丁稚の時内れお嬢さんのお伴をして稽古屋通ひ其頃貴女は下女をお伴に連れ同一師匠へ琴のお稽古お目に懸つた事もあつたに世の變遷とはゝひながら政府の制禁の密淫賣賤しい稼業をなさるゝとは眞に夢のやうに思はれます」お竹「是も綺麗な身体ならば此いお氣にもならぬなれと花房さんの壓制で一旦妾になり下り人にも彼是言れた身体濡ぬ内こそ露をも厭へ濡て雨をも何のそのと精一杯に奮發して思ひ切たる此働ぎ」文七「御奮發も事に因る何の是が働ぎと言れませう既に故人の歌にもある通りかばかりの事ゝ浮世の習ひぞと許す心の果ゝ悲きとやら濡ぬ内こそ露をも厭へだの一寸切られるも二寸切られるも同じ事だのと惡い事をする口實の種に世間の人が能く口癖にい惡事だがアレゝ大きな心得ちがひ一尺の疵なら療治も叶へど二尺の疵では命はない惡は小しきなりとも作す莫れといふ古人の訓

誡さへあるものをたとへ僅の過ちでも過ちと知たらすぐに改めるのが人の道是のら心を改めてこんな賤しい稼業はなさらずに手内職なり裁縫なり正しい稼ぎをなされまし と云つゝ紙入れ中より半圓紙幣一枚を出してソット紙に包み「是は眞に輕少ながら相怕持合せがありませんからとお竹の前へさして出えけり

第拾八回

父母いかゝれとてしも烏羽玉の夜道に濡る情の切賣（下）

中西の手代文七いお竹に向ひて尙も語を次ぎ「眞に失敬ながら是で御隱居樣に御老体の御滋養になるやう牛肉か鷄肉かお口に適ものを買てお上げ下さりませと云にお竹い氣の毒さうにその包みをおし戴き「お貰ひ申していすみませんが折角のお思召しゆゑと云を打消し文七いホット計りに嘆息し「夫式の事に何のお禮に及びませう卿のお身の上を聞よつけ心に懸るい主家の行末東區内で一二の舊家と自分免計で高く止れど内憂外患併至れる引續いての費用に漸次に財產は痩る計り卿のお内が好い標準今の間

に改革せねば頓て卿のお内同樣西區の出來星商人に横領され墓場へ草の生るやうなるい必定既に主家の香具店い貸金の爲に花房に取れて今では同家の出店又朝川の墨筆店の巨文堂も同く花房の所有に成るのみか頃來聞けば同家の所有の濟島町の抱屋敷は本町の曲りの鷄野よ占められたとやら是を見彼をば聞につけ夜の目も寐られぬ小生の心配夫にひきかへ本町の水穗は東區内の舊家の内ではあまり人にも知られぬ小店小生の主家なぞでい別家か分家のやうに内々下目に見てをりましたが御一新以來いメキ〳〵仕出して今では西區の烈しい商人も水穗の商賣上手には手を置て後生畏るべしとい此事だと口を極めて賞てゐるとの評判卿のお内と水穗の店とい親類御同樣な舊しい交際彼家へ縋つて万事の御依賴うち明て御相談をなされたら必ずお爲になりませう小生も歸つたら店の大番頭利兵衛に卿のお内の果敢ない始末を詳しく話して分別を借り小生の店からも水穗の店へ程刻く引合ひ成ふ事なら中西水穗天野の三家が水と魚との交際を結び何彼につけて談ず合ひ手を引合て花房へ佛蘭酒會社その他の烈しい西區の商人

の尖い商賣の掛引を防ぎ又二つにゝ内本町の熊野の亂暴をも御ぐやう夫等の手段に盡力しやせうと言つゝ煙筒に煙管を納め「二つひお話が長く成て思はぬ時間を費しやした主家へ歸る時刻の都合もあれば今晩ゝ此やゝお別れと致しやして何れ近日又お宅へ伺ひやせうと言つゝ立をお竹ゝ遽てゝ片手に文七の袂を執へ片手に疊みし蒲團を展そを文七と見て不審の面色「卿小生を引

留めて未何ぞ御用がどざりやすかと問へばお竹は耻しさうに「アノお金を戴いて只お返しし申してゝ濟やせぬ故と聞より文七ゝ腹立ち聲「ヱゝお情けないそのゝ言葉只返してゝすやぬとゝソリヤ如何いうお詞でおざりやす左迄に卑屈なお心にお成り下りあされたか淺廟しいたとへ小生が無分別にも餞のお情けに預りたいとお願み申したその處が如何に御零落あされても天野の御息女高が中西の手代の文七顏がさすもゑ其儀とおお斷りなさるのが當前夫に何ぞや卿の方から袖褄ひくとゝゝ大間違ひ卑屈と申しやせうか猥褻と言やせうか云うやうのないお不心得と言れてお竹は顏赤らめ「正眞に妾とした事が花房の壓制もゑに吾知す此も卑屈に陷入たのか此夏本町の東堀を通つた時水穗の仲士が妾を指ざし淫賣々々と云た時たとへ痩ても枯ても天野の娘を淫賣なぞゝはあやり人を見下るにも程のあると涙ながらに吾家へ歸り父の土齊にその事を云て一晩悔し涙ゑ泣き明したがいつの間ゑやら此樣に心の底から密賣淫よなりすやし耻を耻とも思ゝぬ迄成り下つたか淺廟しやと吾と吾身をかこち泣き其やゝ其處へうち臥しけり

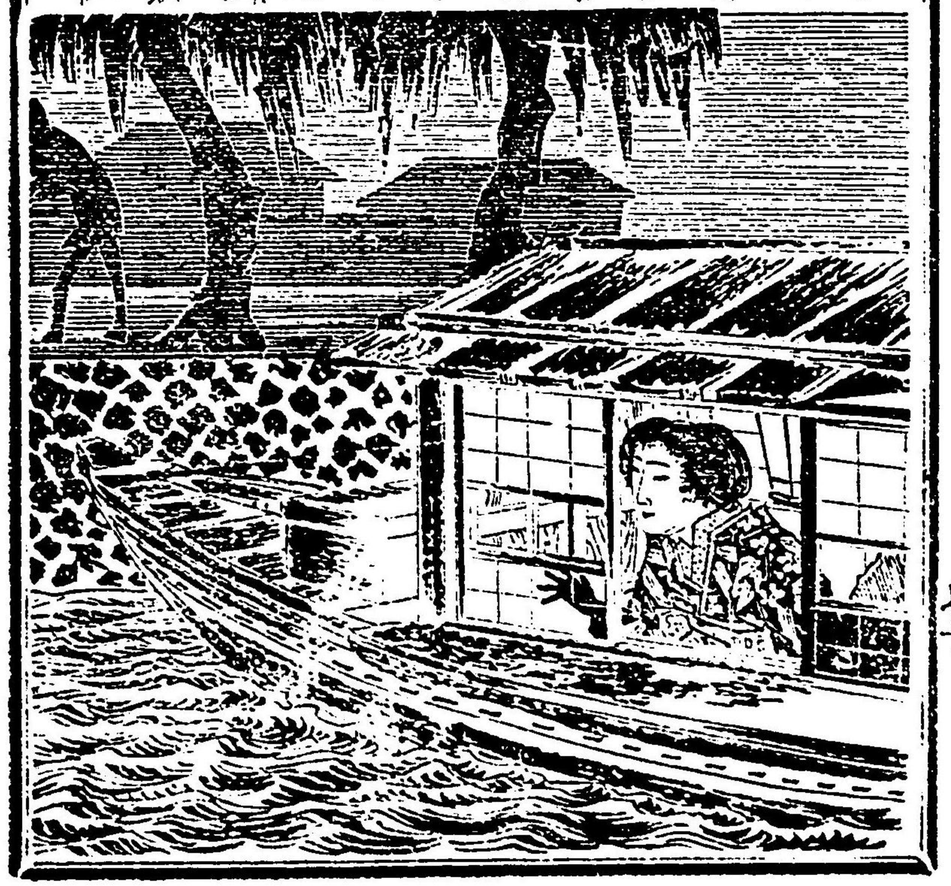
第十九回

牛頭馬頭の見に癪しい二個の囚徒の手錠の鄰を圖らず救ふ救神の片根船

(四)狼嗤ても知れるものだ旦暮れ前の事訃ア八「此ちガラ熊そんな時代な歌が唄ふあ列聞が惡い熊「聽ふ痴狂八や時代といへばお嬢様風る一件が出るのは寵か此處等だなア八「ナニ一件とは熊「合點の惡い一件といふ淫賣の事よ八「淫賣なら一件ちやアーあくつて十件だ熊「エヽ餘計な事を云なさんなそんな無益なことつけより何と淫賣の喰逃げをする氣はねへり八「賛成々々大ヒヤ〳〵たどへ喰逃げをしたからと云つて兄が不正の商賈だからマサカ細代淫賣の告訴もしめへ熊「代言口調でペラボウに堅く出やアーがるな八「當世ハ是でおければ色事師にハなられねへ熊「色事師が賣淫喰逃げとは大笑ひだ八「夫はさうとそれ喰逃げの計畧は熊「計策ハ密なるを以て可とそると能く講釋師いふけれども中々甘口でハおぼつかねへマア一寸耳を貸ねへ八「友達つくだ首ゞる処貸てやらうと云つヽ寄せる耳と口八「ムヽムヽムヽ天晴妙計奇妙々々といひつヽ瓦屋

橋を西へ渡り來るハ記章佯天の裏を着たれハ誰が子分のは瓢絞りの手拭肩に二人の町橋の袂に佇立をたる女を見るより點頭き合ひ「ムヽ此子だ〳〵といひ乍傍に突ト寄り月光ふ透見て八「姉さんお前は顔に似ねへ惡い事をする子だのう熊「早く茲へ出してしまひねへと云れて女ハ不審顔女「いつ妾が惡いことを致しやしたソシテ出せとは何をと言ハせも果ず八「ナニ惡いことハした事ハねへと此間我輩等が二人連で新琴平の前でお前と立話をしている時特務に見つけられて喫驚敗亡熊「逃る機會に己らの懐中の道樂持をさらつて逃たが惡事でないが八「早く出さないと交番所へ引摺て行からさう思へ女「何で妾がその樣な熊「惡事を去たかしねへかハ八「交番所へ行けば分る話ナットも早く吾輩等と一所に熊「早く來ねへと手を取て無理に橋向ふへ連れ行き藏の陰なる川岸端へドウと引ぞゑ力任せ手足を押へて無理無体既に手込ゐせんとする折から北の方より漕くる屋根船内に乘つたる一個の娘アレヨ〳〵と泣きわめく河岸なる娘の聲を聞つけ月に透去て驚き顔「ヲイ船頭そん早く彼の子を助けてあげてといふを聞より船

頭い舟を止め「チッと合點でござりやすと櫂おつ取て河岸へ飄然「ウヌ泥坊めと怒鳴り付れば二人は是に不意を打れ女をうち捨一目散迹をも見ずして逃去つたり舟を立ちゝづる立派な娘孔母かと思いスヽ女と俱に大地に泣伏せ姫を起し船頭と一所に介抱しつゝ月の光りお透し見て「チヽお前いお竹さん」ヤア貴女い水穂のお菊さん面目無と逃んとするをお菊い袂を史止め「今日い長堀の或紳商の忘年會に



招かれたれど折惡しく腦病にて人力車に搖らるゝ事の物憂ければ故と舟にて行く途中圖らず此處でお前さんの難儀を救ふも不思議の緣人間の一生は七轉八起浮沈みのあるい世の習ひ貴女の今日の御不幸い中西の手代の文七と北の畠にゐる道龍先生に詳しく聞てお氣の毒身に摘されてお痛いしさにドウか中西のお家とも御相談申し可成き丈のお世話をして昔の天野のお店に復したさ内々心をつかふてゐる處此處でお目に懸つたは丁度辛ひヤツともかくもアノ舟へと泣入るお竹を誘ひて徐に船にぞ扶け入れける

第二十回

湯の盤の銘々に江世の事故を談話し合ふ湯屋の湯桁の高談

湯の盤の日々新も今日は宵越しの湯と共に陳腐く明治の聖代の洗湯は浴客の拍手に應じて三助は忽ちヒヤ〳〵と水盤の栓を拔ば湯は斷ず新陳交退して時々刻々に新おり男女席を同ふせざる良風俗は軒下に掲げし標目と共に明けく朝廷の善政美法に則りて熱からず又冷からず溫度能ろの中庸を得たる中船場の文明湯夕餉過の雜沓は宛も鼎の沸が如く喋々囂々洶々沸々語るもあれば笑ふもあり唄ふもあれば號るもあり江湖の事故の談話あひ男といふ字を三つ寄て何故かしましと訓ざるかと不審を生ずる男湯室の湯桁の隅に一團欒淨留里小歌をうるさしと許由めかして耳の端を洗ひながらの高談「西區の花房が巨文堂の筆店を何の爲に押領したのか一向に分りません何故といつて御覽なさい彼の位の財產を保ち何不自由の無い身でありながら多寡の知れた小さな店を占領した處が支配人もおかねばならず又丁稚も遣はねばならず却て餘分な入費が掛る譯ではございませんかねへ□助さん □「○七さんの御疑惑も一理ありますが是は中西の香具店を占領した傳で元より墨筆のやうな小さな商賣を目的にしてゐる花房ではあ

りませんが本店の商賣は一年度に何程と區役所へ判然書出して商業稅がかゝるもの香具店や筆墨店で廿二等か廿三等の下等稅を拂つて置き彼處は諸方の商人が仕入に立寄るを幸ひ密に本店の品物を密賣する目的でせう ○「左樣なら曲りの鰐野が濟島町の朝川の掛屋敷を取込だのも其格ですか □「マア同樣なことだと思はれますといふ傍から△助が口を出し △「お談話の中ですが鰐野の遣口は只一概に密賣を仕やうといふ計りでもありますまい例の的が蠶食主義で得意を殖したり又子分を增したりする爲に喧嘩をする時の足掛りにする目算で本町の水穗の所有地の眞津島を豫て垂涎てゐるといふ噂ですが是も矢張り同ド考へかと思はれまを ○「中西や朝川が良い摸範ですから水穗も迂濶とは出來ませんな □「水穗の店では豫てその要慎をしているといふ事ですから滅多よ氣遣ひはございますまい夫はさうと近來世間に評判の高いアノ風樂屋の治祐湯一件はどうです △「サア私もチットは聞ぬでもございませんが何分事が秘密に屬しているのでどうも判然しませんが何でも朝川の店に關係のあることで朝川の手代の者

と水穂の出入の者とが何か相談をつけて朝川の店を改革しやうとした事から起つた紛紜ださうです ○「その原因ハ此前水穂の店が中西と朝川の二軒を相手取り商賣の懲引の紛紜で裁判を仰いで内濟ですしまた事があつたが其時分からポツ〳〵始つた事だと云が何分道路の風説ですから分らないと云のが眞實でせう □「眞實でも虚僞でもそんな事ハどうでも好い此方等ハとかく區内に事勿れだ △「時に一温もりして上りませう。○「人の噂に身を入て自身が風をひいてハつまらないハヽハックションはい云口の下からもう風の先觸だ

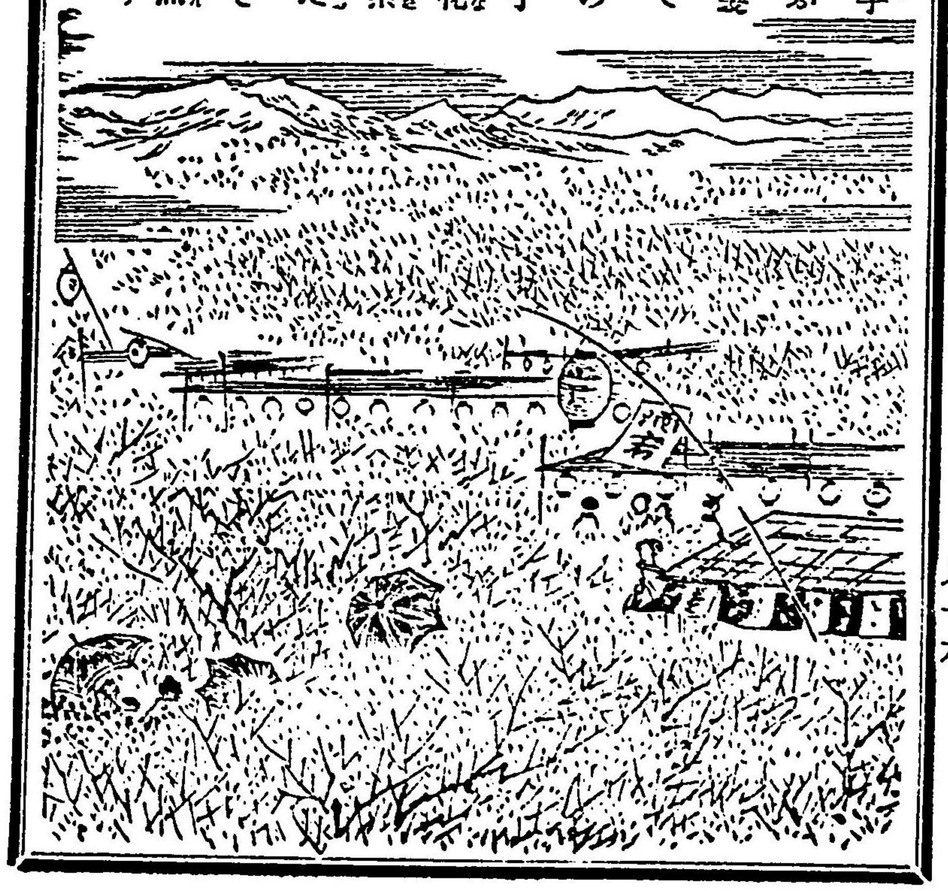
第二十一回

劉關張の昔に倣ひて桃溪に姉妹の義を結ぶ當世の三人娘（上）

唐土の桃源玄都觀といざ知ず吾大坂の桃溪の桃は吉野の櫻月ケ瀬の梅ゐ比ぶ一大奇觀花の盛りは數十町紅ゐ匂ふ霞か雲が錦繡織做す別世界その中央に鎮座せる產湯の稲荷の神官の邸宅に集會ふ人々は花見をかねて懇親會酒とさん〳〵三國志彼の桃林に義

を結ひし劉關張の三傑ならで水穂中西天野の三家の世嗣の娘の三美人お菊おしんお竹を始めお菊の乳母のお三おしんの母のお華番頭利兵衛手代文七お竹の父の土齊又朝川の主人利之助同家の手代金右衛門など主從二十餘名孰も東區にて舊家豪商と言はるゝ家格の事なれど主從の衣裳互に美を飾る中に自から品あり上下の禮義共に親みを盡す中に自ら節有て何彼に秩序の能く調ひ一見人をして賞贊に耐ざらしむるの趣きあり中よも衆目を驚かせしハ三人の娘の粧飾へにて水穂のお菊ハ頭髮は西洋と日本の風とを折衷せる一種の束髮に結ひ東京の名工某が天逆矛に摸したる金の簪を以て之を留め籠甲よ菊の蒔繪したる櫛をさし薄桃色のお召縮緬の下着を二つ重ね其上ゐ裾ゐ光琳風の菊を染いだしたる黑の紋附を襲ひ菊の摸樣を織出玄たる古代の大和錦の帶を締め中西のおしんハ固より華美を好む性質なれバ頭髮は大きゐる島田に結ひて金の根がけを掛け大なる翡翠に金足を添たる簪を刺し金に飛龍の彫刻せる櫛をさし菫金色の支那縮緬の下着を二つ重ね其上よ紅梅の裾摸樣の紺戸色の紋附を襲ひ飛龍の地紋を織

出したる黒の古緞子の帶を締め手に金の指輪を幾個か穿め天野のお竹はやゝ蓮葉なる性質なれば頭髪は銀杏がへしとかゝふ風ふ束ねて是も大なる珊瑚珠を附たる金足の簪を刺し瑞瑞の櫛をさし緋鹿子の下着を二つ重ねて其上に蓮の花を白く染抜きたる裾模様の藤紫の紋附を襲ひ古錦繡の帶を締めたるが濃抹淡粧各自其形容を異にすれども名に負ふ富限の娘とて自然に備はる高尚き品位殊に孰も衣



姫に越え西施を凌ぎ彌須陀羅女を欺く麗人美女のみあれは此桃溪の花も羞ふはかり花を見にとて集ふたる他の諸人の目ゑ一種艶麗極まる解語花を見せしめ此處に一段の奇觀を添けり今日の會主は即ち水穂のお菊にて過日瓦屋橋の濱にて天野のお竹の危急を救ひて吾家に連歸りたが夫方先に中西の手代文七幷に北の畠の修行人道龍法師の話説にても詳く天野が零落の形狀を知り中西の番頭利兵衛とも相談なた天野中西水穂ハ互に東區の舊家にて親族にも齊しき交際なれバ傍觀すべきに非すと密ふ心を痛める際なればお竹の災厄を救ひたる由を利兵衛に告げ是も免ぬ中なる朝川とも談合して花房方へ水穂中西朝川の三家より話を附て舊債を債のひ新に資本を貸て天野の家を再興し水穂の番頭伊兵衛中西の番頭利兵衛が後見役となり舊家の珠數屋は開明の時世に遲れたる商賣なればとて茶商に改めさせ盛に商業を營ませしが其幇助の甲斐ありてやゝ天野の店の仕法も立ちけれバ一つは之が喜びを表する宴會二つには今後尚水穂中西天野および朝川の四家ハ水魚膠漆の交りを結び他の東區商人の勇氣を皷舞し商業の活潑に

して西區の商人の凌虐を防ぎん爲めの懇親會を開きしなり酒宴や、酣なる時お菊は起立りて衆賓お向ひ左の演說をぞあしにける

第二十二回

劉關張の昔に倣ひて桃溪に姉妹の義を結ぶ當世の三人娘（下）

お菊は綻びかゝる梅の花の如き愛らしき口より鶯の谷の戸出る初音も此くやと思はるゝ計りの微妙なる聲をいだして演說するやう お菊「天野のお家の零落を傍に觀すごす其時は唇破れて齒寒しの喩へ夫に親しき中西樣や朝川樣や吾店も漸次に西區の商人に輕蔑され商業の不利益を來すのみゝ隨つて東區一般の恥辱と皆々樣に御相談申せしに孰れも樣にも御承諾ありて天野のお家を御扶助下されお蔭を以て天野樣も昔の通りといふにはあふねど舊の屋敷へ暖簾を掛け一本立ちある商賣取引そのお禮をぞ述べたさにお竹に代つて妾が會主に成り皆々樣を御招待申せしよ此う打揃ふて能おとそおいてお竹さんは固より妾も眞に嬉し存思ひます夫に就て此後の御相談も申したくサテその

御相談と云ゝ他でもない中西樣のお所有の香具店又朝川樣のお所有の巨文堂の筆墨店又濟島町の掛屋敷を花房と鷲野に占領められ又妾方の所有地の松島の屋敷をも曲りの鷲野が占領むる手段去年の夏に平野山で妾に仇した二人の凶漢も鷲野の子分と花房の出入の者だとやさんを手籠にした二人の凶漢も鷲野の子分と花房の出入の者だとやら此勢ひに任して捨て置たら金力と腕力のあるに任して此末どんな亂暴を仕向けて來るかも知れざれゞ今の間にその要愼是迄互に何やら彼やと角芽立たる事もあれども夫をば大川の水に流して處も幸ひ桃溪の桃の林の今日の集會にお志んさんとお竹さんと妾と三人劉關張の類みに倣ひ姉と妹の義を結び朝川樣も共々お力を脇せ心を同

に玄智力も金力も資け合ひ飽迄商業に勉強をて東區の商人は舊家と門閥に誇り肝心の商業には不勉強ぢやといふ世間の譏りを撲滅して西區の商人に侮られぬやう爾來心を用ひたく御相談と申すと此事にこそと言へバ利兵衛は點頭きて一夫い何より結構な御分別其事なれば貴孃の方より私の店から願ふ所豫て貴たも御存知の如く先年煙草一件の間違ひから花房や大東と裁判沙汰此方は不馴先方は功者入費に遂れてトウ〳〵和解おさけよ損害要償金を澤山取ふれ彼や此やで損の上塗大東と今度の地所の出入もやう〳〵和解で事りすんだが重ね〳〵の裁判入費且は商業の不景氣おどにて先祖傳來の家屋邸宅貯蓄の財寶迄追々減少漸次に不如意の中西の身上といふ

語を次いておしんも進みいでおしん「此さ、花房や大東や鷲野達の吾儘勝手に任して於て終に中西の暖簾は人の物と利兵衛が度々の意見の言葉に妾も始めて氣がついて内〳〵心配してゐさしたが貴嘸が爾ういふお心おち互ふ姉とも妹とも成てと聞るお竹れ嬉しげに「お菊さんもおしんさんもそういふお心なれば妾よ於ては此樣なといふ傍より朝川始め土齋文七お三も共々「その喜びは誰ゑも同ド事ぞうゞ行末長く一家の親睦み互に實意をつくし合各自稼業に勉強して主從脇和上下一致西區の出來星商人に凌虐ぬやうと云にお菊れ大に喜び「皆さんがさういふお心になりさへすれバ假令花房が獅子の爪を磨き鷲野が鷲の嘴を尖らすとも教師の雨森さんを後

見に之を防ぐに難からぬのみか遂には是に上越す事も出來させう如此な目出度い事はないと是より改めてお菊おしんお竹三人天を祭りて姉妹の杯を取交し互に喜びをつくし興をつくしその日の夕方おの〳〵吾家へ歸りしが其後此誓を變ず互ひに信義をつくし商業を助け合ふこと眞の親族の如く漸次に商業繁昌すれば花房大東等の西區の商人は更なり蹉暴極まる熊野も如何とも詮方なく從來とは違ひいと正確なる商業上の取引を爲さをるとぞ目出度き〳〵

（終）

明治十八年十二月十二日出版御屆
同　十九年一　月十五日刻成出版

定價金五拾錢

編輯兼出版人　東京府平民　歌川國松　東區北濱壹丁目廿七番地寄留

大阪府平民　大賣捌　岡島支店　東區備後町四丁目三番地

仝　日野商店　東區淡路町二丁目十三番地

大日本文學士　春の屋朧　先生戯著

歌川國松先生　美畫

諷誡　京わらんべ

全壹冊　近刻

本篇は當生書生氣質を戯述して名を東京に轟かされたる春の屋おぼろ先生の戯作にして奇々妙奇的烈なる滑稽本なり其脚色といひ其文章といひ尋常の小説とは同ドからず專ら風來の著作に擬して世俗を諷刺されしものなるも始終文外ゐ寓意多かり匆々輕々に讀過すれば華族官員書生乙女若くは娼婦などの事蹟ゐ關せる一小話譚たるに過ざれども細嚼熟讀をなすに至りて徹妙諷意ゐるを發明するべし殊に束髪會羅馬字會乃至假名の會に關する議論は暴論のうちに取るべき理もあり頗る參考家の材料ともなるべし四方の君子乞ふ熟讀を賜へと爾云

次阪東區淡路町二丁目十三番地

日野商店敬白

各府縣下賣捌書林

大坂南區心齋橋北詰　駿屋々
順慶町三丁目　東京支店
心齋橋南詰　靜雲堂
北區堂島中二丁目　柳原喜兵衛
東區北久太郎町　吉岡平助
備後町心齋橋角　北尾新聞舗
淀屋橋南詰　花本文昌堂
北久寶寺町三休橋　小谷卯三郎
備後町心齋橋　華井卯七
安土町四丁目　太田權助
西京三條蛸藥師　藤村松之助
四條　今井長兵衛
三條東洞院　東井吉兵衛
横濱太田町　萬字屋
東京日本橋區新よし町　長明堂
全元大坂町　滋木德兵衛
全神田雉子町　巖々堂
神戸縣廳前　吉川五郎
大津驛　藤田支店
全上京町　澤一郎

堺區熊野町　森寛次郎
紀州和歌山本町　通運會社
播州姫路　山野長平
備前岡山　田定五郎
尾ノ道土　三木文明堂
薩州廣島　松村善助
全　柳川種
雲州松江　岡山喜右衛門
筑前福岡　廉井五樂堂
備后福山　珍臨
伊豫松山　牧田嘉平
阿州德島　坂井萬吉
讃州丸亀　開文社
土佐高知　櫻木巢鋪
肥前佐賀　河内莊助
筑後久留米　赤司平二郎
防州山口　阿部半助
肥後熊本　長崎次郎
肥前長崎　松野双松堂
薩州鹿兒島　富山仲吉
全　吉田幸兵衛

東京圖書館

和書門	類	一函	二架	三五號	一冊